第121回　日文研フォーラム

■

明治初期における朝鮮修信使の日本見聞

On Some Observations of the Yi Dynasty's Envoys
in Early Meiji Era of Japan

■

宋　　敏
SONG Min

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　河合　隼雄

● テーマ ●

明治初期における朝鮮修信使の日本見聞

On Some Observations of the Yi Dynasty's Envoys in Early Meiji Era of Japan

● 発表者 ●

宋　　敏
SONG Min

大韓民国・国民大学校教授
Professor, Kuk-Min University, KOREA

1999年9月7日（火）

発表者紹介

宋　敏
SONG Min
大韓民国・国民大学校教授
Professor, Kuk-Min University, KOREA

1937年10月　大韓民国全羅北道益山市生まれ
1963年 8月　ソウル大学校文理科大学国語国文学科卒業
1985年 8月　ソウル大学校大学院博士号 (文学) 取得
1967年 3月～1984年 2月聖心女子大学専任講師、助教授、副教授、教授
1971年11月～1972年 8月東京大学文学部外国人研究員
(Harvard-Yenching Institute's Visiting Scholarship)
1979年 8月～1980年 8月東京言語研究所研究員
(The Japan Foundation's Fellowship)
1984年 3月～現在　国民大学校教授
1987年 2月～1989年 2月韓国日本学会長
1990年 6月～現在　国語審議会委員
1993年 8月～1995年 1月国民大学校文科大学長
1995年 1月～1997年 1月国立国語研究院長
1998年 3月～1999年 2月国民大学校文芸創作大学院長
1999年 3月～現在　国語学会長
1999年 3月～1999年11月国際日本文化研究センター客員教授

主な著書・論文

- 「韓日両国語比較研究史」(聖心女子大『論文集』1、1969年)
- 「上代日本語の母音体系」(韓国日本学会『日本学報』3、1975年)
- 『日本語の構造』(関東出版社、1977年)
- 「日本語動詞の活用規則」(『日本学報』10、1983年)
- 『前期近代国語音韻論研究』(塔出版社、1986年)
- 「韓日両語の比較について」(大修館書店『日本語の古層』、1987年)
- 「朝鮮修信使の新文明語彙接触」(国民大『語文学論叢』7、1988年)
- 「開化期新文明語彙の成立過程」(『語文学論叢』8、1989年)
- 「開化期の語彙改新について」(『語文学論叢』11、1992年)
- 「近代国語の音韻論的認識」(檀国大東洋学研究所『東洋学』24、1994年)
- 「開化期新生漢字語の系譜」(『語文学論叢』17、1998年)
- 「開化初期の新生漢字語受容」(『語文学論叢』18、1999年)
- 『韓国語と日本語のあいだ』(草風館、1999年)

一　はじめに

豊臣秀吉の朝鮮侵略、すなわち文禄・慶長の役によって最悪の状況にまで陥ってしまった朝日関係は徳川家康の努力によって回復に向った。一六〇〇（慶長五）年、関ヶ原の戦いに勝利を収めた家康は、早速「日本朝鮮の和平の事、古来の道なり。しかるに太閤一乱の後その道絶えぬ。通行は互いに両国のためなり。まず対馬より内々書をつかわして尋ね試み、合点すべき意あらば公儀よりの命と申すべし」と対馬の藩主宗義智に朝鮮との和平交渉に全力を注ぐよう命じた。その結果、一六〇七（慶長十二）年には国交回復の朝鮮使節が初めて江戸を訪ねるようになる。それ以来、朝鮮朝廷は二〇〇余年の間、合計十二回に亙って日本に使節を送ってきた。これがいわゆる朝鮮通信使である。その規模四〜五百人におよぶ一行は漢陽（いまのソウル）を出発して大体六ヶ月から一年に近い日にちをかけて江戸まで往還してきたが、十九世紀にはいってからは一八一一（文化八）年、最後の通信使を対馬に送ったきりで、日本との外交的交流は途絶えてしまった。これで朝鮮通信使の日本往還はなくなったのである。

その後、同じような状況が続くなかで、一八六五年十二月には英国の商船ロー

ナ号が忠清道調琴津に碇を降ろし、通商を求めたが追いはらわれる。一八六三年十二月、自分の息子が王座についてから、大院君になって政権を握った李昰応は、大幅な国政改革を推しすすめる一方、一八六六年一月からは西教（天主教）に対する弾圧をはじめる。以前から密かに国内へはいり、布教活動を続けてきたフランス人神父たちは勿論のこと、大幅に増えている信徒を引きつづき逮捕、処刑したのである。そうしているうちに、同年七月には、アメリカの商船ゼネラル・シャーマン号の船長プレストンがキリスト教宣教師トマスをはじめ、四人の西洋人と十九人の清国人およびマレイ人を乗せて、平壌の新場浦江にあらわれる。しかし、平壌観察使朴珪寿の退去要求に応じなかったため、シャーマン号は官民の火攻めに遭い、炎上してしまう。この事件をきっかけに朝廷は同年八月、斥邪綸音を頒布し、西教弾圧を一層強めるとともに、洋貨の貿易を禁止するようになる。

ところが同年八月には、フランスの東洋艦隊司令官ロズが率いる軍艦三隻が京畿道南陽府の沖にあらわれ、一隻は富平府勿淄島の前方まで進む。その後の九月、フランス軍は江華府と通津府に侵入し、放火と略奪を恣行したため、大院君は議政府に回章を送り、洋夷保国の決意を固めるようになる。他ならぬ鎖国政策の強化である。しかし、フランス軍は文殊山城と鼎足山城を引きつづき攻撃、朝鮮側

の守兵と衝突したので、双方ともに多数の死傷者を出した後、フランス軍は撃退される。これが丙寅洋擾である。

翌年の一八六七年一月、アメリカ軍艦ウォトゥセト号艦長シュペルトは平壌の大洞江入り江にあらわれゼネラル・シャーマン号事件の解明を要求したことがあり、その翌年の三月にはアメリカ軍艦セナンドア艦長ペビガーがゼネラル・シャーマン号の生存者捜索の名目で大洞江入り江に停泊したこともある。一八七〇年五月には、東京駐在のドイツ公使ブラントが、日本外務小丞馬渡俊邁、対馬通事中野許太郎と一緒にヘルター号で釜山にあらわれ通商を要求したが拒絶される。さらに一八七一年四月には、駐清アメリカ公使ローが通商を要求するため、アメリカのアジア艦隊司令官ロージャスとともに五隻の軍艦を率い、南陽府楓島沿岸にあらわれる。そして、アメリカ軍の陸戦隊は広城鎮を占領したが、朝鮮守兵の夜襲を受け母艦に退けられる。これがいわゆる辛未洋擾である。こうしたフランス軍とアメリカ軍との戦いで朝鮮側はなんとか勝利を収めたかのように見えたが、問題は日本だったのである。

二　朝鮮修信使の始まり

徳川幕府が倒れてからは朝日間の外交問題も新たな局面を迎えるようになる。明治維新に成功した新政府は、王制復古を各国公使に通告した後、朝鮮朝廷に対しても従来の関係回復を求めた。同年十二月、対馬の家老樋口鉄四郎は日本の新政府成立通告書を朝鮮側に伝えようとしたが失敗に終る。一八七二（明治五）年にも釜山の倭館に滞留する外務省官吏が旧例とは異なる書契を伝えようとしたが退けられる。いよいよ一八七五（明治八）年一月、日本国理事官森山茂は外務省の書契を改めて東莱府に寄せ、その受付を要求したが、これも退けられてしまう。そうなると四月にはいり、日本側は森山の交渉を援助すると同時に朝鮮朝廷を脅かすため、軍艦雲揚号など三隻を釜山に入港させる。その後の八月、雲揚号は江華島の草芝鎮沿岸に移動してくる。一種の脅かし作戦であったが、江華島の守兵が砲撃を加えたので、雲揚号は退けながら永宗鎮に砲撃を浴びせた。これが江華島事件である。翌年の一月、日本からは特命全権弁理大臣黒田清隆、副使井上馨が京畿道南陽湾に到り、江華島事件の談判を要求するので、朝鮮朝廷は接見大臣申櫶、副官尹滋承を送り江華営で協議を進めた結果、日本との条約が成立する。こ

れが一八七六年二月二日（新暦二月二十六日）に結ばれた朝日修好条規（十二款）である。これは朝鮮朝廷が外国と結んだ最初の通商条約である。

朝鮮朝廷は鎖国政策を捨てざるをえなくなったのである。通商条約の成立によって日本との国交が改めて開いてから日本側の要求もあって、朝鮮朝廷は修好意思の標として日本に使節を送ることになる。これが他ならぬ朝鮮修信使の始まりである。こうして最初の修信使が海を渡ったのは一八七六（明治九）年四月のことである。その後の数年間、修信使の派遣はなかったが、一八八〇年、八一年、八二年、八四年にはいろんな事情から修信使が改めて日本に送られる。但し、その名称は時代の流れとともに特命全権大臣兼修信使、あるいは欽差全権大臣と変わっていくのだが、その性格に変わりはない。一方、修信使ではないが一八八一年にはいわゆる紳士遊覧団員十二人と随員一行がそれぞれ一定の任務を背負って日本を視察しながら、相当長い期間に亙って政府各省と税関などを訪ね、その制度や法規を調査するとともに該当分野の実務を詳しく見習ってから帰国する。いずれにしても前後五回に亙る修信使派遣は一八八四年を最後にみえなくなる。最早ソウルに日本公使館が設置されていたので、その必要性がなくなったためである。

ここでは便宜上、こうした明治初期における朝鮮使節と実務研修団であった紳

士遊覧団を一括して朝鮮修信使と呼ぶことにする。ところで彼らは、むかしの通信使とはいろんな意味で異なる。なによりも彼らは日増しに新しく生まれ変りつつある日本の現実をみたのである。それはいわゆる文明開化であり、西洋化であり、機械化であり、軍事化であって、当時の修信使たちはその社会と制度の変化一つ一つに対して目を見張ったに違いない。そういうわけで、明治初期における朝鮮修信使は、一般にむかしの朝鮮通信使から切り離して取り扱われる場合が多い。現に、いままで公になっている朝鮮通信使関係の著作には、大体明治初期の朝鮮修信使が含まれていない。(1) それは両方の性格がそれほど異なるからであろう。

三　朝鮮修信使が残した記録

修信使一行が日本でみたのはあらゆる側面に跨っており、その内容も多様複雑である。中には往復の過程で自然に目にはいったものもあれば、日本政府側の勧めにしたがってわざわざ見物したものもある。当時としては最高の知識人であり、高級官吏でもあった修信使は、現代式に言えば外交官資格で日本を訪問する。だからこそ彼らはいつも使臣としての品格を保ちながら物事に臨まざるをえない。

私的判断や感情的な言動は許されない。そういう当時の朝鮮人の目に映った日本の文明開化は彼らの記録に一応冷静に描かれている。しかし、たまには主観的判断を記す場合がなくもない。ところがすべてを批判的にみたわけではない。ある時は感動して讃えたり、ある時は驚いて嘆く。とにかく複雑な気持で日本の現実を経験したのであろうが、全体的にはやはり批判的な態度をみせる場合が多いといえる。彼らが残した日本見聞記はいろいろあるが、ここでは、当時日本の現実を知るうえで欠かせない価値を有すると知られている史料のうち、次のような文献を対象にして、その内容を垣間見ることにする。すべては漢文記録である。

金綺秀（正使）、『日東記游』四巻、一八七六年の見聞

巻一　事会、差遣、随率、行具、商略、別離、陰晴、歇宿、乗船、停泊、留館、行礼

巻二　玩賞、結識、燕飲、問答

巻三　宮室、城郭、人物、俗尚、政法、規条、学術、技芸、物産

巻四　文事、帰期、還朝

李鑢永（紳士遊覧団の一員）、『日槎集略』三巻、一八八一年の見聞

巻天　封書、別単、聞見録、海関総論、八月三十日四更復命入侍時
巻地　日記
巻人　問答録、詩句録、同行録、散録

朴泳孝（正使）、『使和記略』一巻、一八八二年の見聞
日記

朴戴陽（従事官）、『東槎漫録』一巻、一八八四～五年の見聞
日記、東槎記俗、東槎漫詠

おおざっぱに言えば、日本で経験した物事に対し、金綺秀はすべてを冷静に見つめている反面、李鑢永と朴戴陽は時々率直な批判を躊躇わない。中でも朴戴陽は一層鋭い批判を加えている。正使でない彼にはそういう裁量があったからなのか、あるいは彼がもともと保守的であったからなのか、その辺の理由ははっきりしないが、恐らく後者だったと思われる。一方、朴泳孝はほとんど批判的態度をみせない。実際、彼は後日、親日的な開化派に加わり政変を企んでから日本に亡命した人物なので、最初から進歩的性向の持ち主であったからであろう。

詰まるところ今回は、以上のような記録の中から自分なりの基準によって歴史

的に意味があると思われるいくらかの見聞内容を一定の基準によってまとめて読みながら、彼らが明治初期の日本について一体なにをどのような態度でみており、彼らの見聞は現代の我々にとってなにを意味するか、などについて暫く触れてみたい。

四　修信使の日程と訪問先

修信使たちの見聞内容を理解するためには、彼らが日本に渡るまでの歴史的背景と、彼らのおもな日程および訪問先を予め調べておく必要がある。それを一覧すれば大体彼らの見聞内容に見当がつくからである。ここに彼らが日本行きの蒸気船に乗る日から故国の港に戻る日までの足跡を簡単にまとめてみる。漢字表記は原文に従うが、特に人名、地名などの固有名詞にかかわる漢字の誤りは括弧のなかに正しい表記を添えておく。当時の朝鮮は依然として旧暦を使ったので、日付はいずれも旧暦であるが[2]、日本はすでに一八七三（明治六）年から新暦を取りいれたので、参考までにそれも併記する。

(1) 金綺秀の場合（一八七六年四月二十九日から閏五月七日、明治九年五月二十二日から六月二十七日まで）

朝日修好条規（一八七六年二月二日、新暦二月二十六日）の締結をきっかけに、長いあいだ途絶えていた日本との修好、それも当時の朝鮮朝廷にとっては決して喜ばしいとはいえない外交を再開するに際し、最初に選ばれたのは学者的気質の持ち主として知られた金綺秀である。応教（正四品）であった彼は、礼曹参議（正三品）に昇進すると同時に修信使に任命され、日本の土を踏むようになる。最初の修信使であった彼は、東京で二十日間滞在しながらも、できる限り見物を避ける。そのため案内役と口論したこともある。

四月二十九日（五月二十二日）、釜山浦で日本火輪船黄竜丸乗船
五月一日（二十三日）、赤間（馬）関到着、永福寺で昼食
四日（二十六日）、神戸到着、会社楼で昼食
七日（二十九日）、横浜到着、火輪車で新橋に到り、人力車で延遼館到着
八日（三十日）、外務省訪問、到着挨拶
十日（六月一日）、赤坂宮で天皇に挨拶

十二日（三日）、遠遼館（正しくは延遼館）で下船宴、その後、博物院見物
十五日（六日）、陸軍省訪問、教練場で軍隊操練参観
十七日（八日）、海軍省訪問、水戦操練参観
二十一日（十二日）、陸軍省兵学寮訪問、その後、工部省工学寮へ行き電線見物
二十三日（十四日）、太学、開成学校、東京女子師範学校訪問
二十四日（十五日）、元老院訪問、その後、延遼館で上船宴
二十六日（十七日）、外務省訪問、帰国挨拶
二十七日（十八日）、横浜到着、黄竜丸乗船
閏五月一日（二十一日）、神戸到着
四日（二十四日）、赤馬関到着
七日（二十七日）、釜山浦到着

(2) 李鑢永の場合（一八八一年四月八日から閏七月二日、明治十四年五月五日から八月二十六日まで）

金綺秀が日本をみてきた後、朝廷の内部には外国との通商問題が大きな懸案と

して浮かびあがった。ところが中国は西洋諸国と通商するのはかまわないが、日本に対しては牽制するようにと勧告した。そこに一八八〇年、修信使として日本に行ってきた金弘集は、日本との通商と開化政策を急ぐよう朝廷に申し立てた。そこで一応日本の実情を詳しく把握してみる必要があるという意見が出たので、朝廷はその一策として実務視察団を送ることにした。それがいわゆる紳士遊覧団である。全団員十二人のうち、李鑢永は税関担当であったが、時々見物にも出かけている。公式使節ではなかった彼は比較的自由な立場で日本をみたようで、たまにははっきりとした批判も辞さない。

四月八日（五月五日）、草梁港で日本商船安寧丸乗船

十一日（八日）、対馬の厳原、壱岐島経由長崎到着、人力車で築町一木（丁目）四十九番地吉見屋に行き一日間滞留。海関、師範学校など訪問

十五日（十二日）、博多、小倉、赤馬関、多度津、明石経由神戸到着。海岸通四丁目に一日間泊まりながら海関、鉄道局訪問

十七日（十四日）、火輪車に乗って大阪へ行き造紙局、紡績所、監獄署、博物会、療病院、造幣局、陸軍鎮台、博覧会など訪問または見物

二十日（十七日）、砲兵工廠と師範学校訪問（本人不参）後、火輪車で西京到着、三条石橋堂島町の旅所にはいる。翌日から博物会、西陣織錦所、女学校、盲唖院、西本願寺など見物

二十四日（二十一日）、火輪車で大津へ行き琵琶湖、三井寺（正式の名は園城寺）見物後、神戸に帰る

二十六日（二十三日）、税関にいって税務問答後、三菱商社の二帆広島丸に乗って神戸出発

二十八日（二十五日）、横須賀経由横浜到着、火輪車で東京芝公園到着

五月一日（二十八日）、元老院大書記官森山茂の訪問を受ける

三日（三十日）、外務省大書記官宮本少一（正しくは宮本小一、以下は正しい表記で記す）の訪問を受ける。博物会、博物観（正しくは博物館であろう）見物

四日（六月一日）、外務省、大蔵省訪問。清国公使館を訪問。夕方、旅所を淡路町へ移す

五日（二日）、外務省を訪問して宮本小一と税務問答、大蔵省を訪問して関税局長と筆談で税則略論

六日（三日）、宿所を駿河台南甲賀町へ移す
七日（四日）、この日からは関税局に出入りしながら本格的な海関事務問答を始める一方、外務卿井上馨私第、博覧会の頒賞（褒賞式）、農務局育種場、工部省電信中央局、太学校（大学校であろう）、教育博物館、博覧会、重野安繹私第、清国公使何如璋、陸軍省観兵式、隅田川の海軍競漕演習などを訪問または見物
二十三日（十九日）、火輪車で新橋を出発、横浜到着。弁天通二丁目の西村新七宅を宿所に決める
二十四日（二十日）、この日から横浜税関と港湾に直接出入りしながら税関実務一つ一つを具体的に見習い始めるかたわら、瓦斯局、横須賀火輪船造所（本人不参）訪問
六月十九日（七月十四日）、東京に戻り先日の宿所にはいる
二十日（十五日）、この日から再び大蔵省関税局に出入りしながら『条約類纂』の校正を始める一方、国立銀行局長私第、造紙局、築地三丁目の花房義質私第、芝離宮で行われた宴会、同人社（本屋）など訪問または参席

七月八日（八月二日）、関税局訪問、帰国挨拶
九日（三日）、外務省訪問、帰国挨拶
十四日（八日）、新橋で火輪車に乗って横浜到着、先日の旅所にはいる
十五日（九日）、税関訪問、各国人の居留地界見物。清国理事署、税関局長に別れの挨拶
十六日（十日）、三菱社の名古屋丸乗船、船長は洋人
十八日（十二日）、神戸到着、海岸通町四丁目の旅所にはいる
十九日（十三日）、旅舎を先日の所に移す。税関訪問問答、以後も続く
二十二日（十六日）、兵庫県庁訪問
二十六日（二十日）、県庁、税関に行き別れの挨拶
二十八日（二十二日）、三菱社千歳丸乗船
三十日（二十四日）、赤馬関到着
閏七月一日（二十五日）、長崎到着。税関長に別れの挨拶
二日（二十六日）、壱岐島経由草梁港到着。日本領事館に行き帰国挨拶

(3) 朴泳孝の場合（一八八二年八月九日から十一月二十七日、明治十五年九月二十日から明治十六年一月六日まで）

この年の六月、給料未払や給与食糧の変質などに不満を抱いた軍人たちが暴動を起こし、日本軍事教官堀本礼造少尉[3]を殺害した後、日本公使館を襲撃する事件が起こる。これが壬午軍乱である。日本公使花房義質は一応漢陽を脱出、長崎に逃れるが、七月には軍隊を率いて漢陽に戻り、高宗に要求条件を提示する。とどのつまり、朝鮮朝廷は日本側の要求を受けいれ、済物浦条約と修好条規続約を結ぶことで事件の決着を図る。そういうわけで朴泳孝が特命全権大臣兼修信使に任命され、日本に送られたのである。

八月九日（九月二十日）、仁川で日本船明治丸に乗船出発

十二日（二十三日）、赤馬関到着

十四日（二十五日）、神戸到着、兵庫県令森岡昌純来見。新制国旗を宿舎に掲げる。暫く泊まりながら各国領事の訪問を受ける。

二十一日（十月二日）、副使金晩植と一緒に写真館で写真撮影

二十三日（四日）、汽車に乗って大津に立ちよってから西京到着、各所周覧

二十五日（六日）、大阪に立ちより、砲兵工廠、陣（鎮）台の練兵など見物
二十六日（七日）、神戸に戻る
二十九日（十日）、東京丸乗船
九月二日（十三日）、横浜到着、汽車に乗りかえて東京青松寺到着。外務省に到着通報
五日（十六日）、馬車で外務省に行き、外務卿井上馨、大輔吉田清成、少輔塩田三郎、朝鮮公使花房義質に到着挨拶
八日（十九日）、副使、従事官と一緒に赤坂離宮で天皇に挨拶
九日（二十日）、親王、各省卿、元老院議長、警視総監、東京知事歴訪
十日（二十一日）、この日からは各国公使を訪問する一方、来訪人事接待と各国公使主催の晩餐会参席
十六日（二十七日）、横浜へ出かけ当地駐在の公使訪問、帰り道に神奈川県令訪問
十七日（二十八日）、文部省訪問、大学校生徒卒業宴会参席
二十日（三十一日）、横浜へ行き競馬見物
二十二日（十一月二日）、図書館、女子師範学校、博物館、昌平館、動物

園訪問または見物
二十三日（三日）、日比谷練兵場で行われた天長節行事参席。夕方、外務卿官邸舞踏宴会参席
二十六日（六日）、浅草寺見物
二十七日（七日）、工部大学校訪問、電信局、電機器械廠周覧
三十日（十日）、印刷局訪問
十月三日（十三日）、延遼館で王妃の誕生日記念宴会
四日（十四日）、この日から引きつづき各国公使および各省卿の晩餐会参席
六日（十六日）、王子の造紙所、水輪織布所訪問
九日（十九日）、戸山競馬場見物、午餐晩餐会続く
十九日（二十九日）、陸軍士官学校、砲兵機械廠訪問
二十二日（十二月二日）、この日からは要路を訪問しながら別れの挨拶
二十五日（五日）、横浜へ行き小輪船で横須賀へ渡る
二十六日（六日）、造船所見物後、江島に着く
二十七日（七日）、小田原経由熱海到着、富士屋にはいる。以後二日間温

泉浴

三十日（十日）、熱海出発、小田原一泊後、翌日藤沢経由神橋（正しくは新橋）到着

十一月五日（十四日）、外務卿訪問、帰国日程協議

九日（十九日）、宮内省で天皇に帰国挨拶。以後、要路を訪問しながら別れの挨拶

十八日（二十八日）、横浜で名古屋丸乗船

二十日（三十日）、神戸到着

二十二日（一八八三年一月一日）、神戸出発

二十四日（三日）、赤馬関到着

二十七日（六日）、済物浦到着

(4) 朴戴陽の場合（一八八四年十二月二十四日から一八八五年二月十八日、明治十八年二月八日から四月三日まで）

開化派の金玉均、朴泳孝、洪英植、徐光範、徐載弼らは、この年の十月、郵政局の落成祝賀宴で政変を起こし、守旧派の閔泳穆、閔台鎬、趙寧夏、李祖淵、尹

泰駿、韓圭稷らを現場で殺害する。いわゆる甲申政変である。それと同時に、日本公使竹添進一郎は軍隊を動員、昌徳宮を占領する。しかし、清国軍呉兆有、袁世凱、張光前らも軍隊を動員して昌徳宮へ進み、両国軍隊はついに衝突する。こうなると軍民たちは日本公使館を襲撃し、竹添公使は仁川に逃れるが、金玉均、朴泳孝、徐光範、徐載弼らは竹添公使の船に同乗、日本に亡命する。この事件に対しても日本との協議が必要となり、朝廷は参議交渉事務徐相雨を礼曹参判に昇進させ全権大臣に、協弁穆麟徳を兵曹参判に昇進させ副大臣に任命、日本に渡って問題の解決を図るよう命じる。この時、全権大臣従事官に選ばれたのが幼学朴戴陽である。使節一行は十一月、吹雪に降られながら直ちに漢陽を出発したが、日本から特派全権大臣井上馨が入京したので、その交渉結果を待つようにと命じられる。そして十二月の終り頃、交渉を終えた井上が帰国するにしたがい、途中で待ちつづけていた使節一行も改めて後を追うように出発する。

一八八四年十二月二十四日（明治十八年、一八八五年二月八日）、仁川で日本商船小菅丸乗船出発

二十六日（十日）、赤間関到着

二十七日（十一日）、三光丸に乗り換える
二十八日（十二日）、神戸到着
二十九日（十三日）、次の船便を待ちながら、大阪遊覧。造幣局、器機廠など見物
三十日（十四日）、山城丸乗船出発
一八八五年一月一日（十五日）、横瀬（正しくは横浜）到着。汽車に乗り東京に着いてから、精養館で夕食を取り、新橋南鍋町伊勢勘楼にはいる
二日（十六日）、外務省に行き国書及び奏辞副本伝達
三日（十七日）、福沢諭吉の学校から使いが訪ねてきて、（金玉）均の借金弁済を要求しながら証書を見せるが、正使は断固拒絶、これを退ける
六日（二十日）、天皇礼訪、国書伝達
七日（二十一日）、正使、各国公使訪問始める
十日（二十四日）、従事官が宿所の娘菊の要請に応じて一句の詩を書いて渡したところ、各新聞はそれを話題に取りあげ、欽差大臣が菊娘を愛し、詩を贈ったと報道する
十二日（二十六日）、博物館、動物館など見物

十三日（二十七日）、教場に行き歩騎砲三軍操練参観
十四日（二十八日）、電信局、煤気局見物
十五日（三月一日）、故宮後苑、増上寺見物
十六日（二日）、正副使、横浜へ行き各国公使訪問、その後、横須賀の造船（所）歴覧、翌日東京へ戻る
十八日（四日）、海軍操練見物。正副使、工部大学校訪問（本人不参）
十九日（五日）、夫子廟参拝。師範学校、陸軍士官教場、砲兵工廠見物
二十一日（七日）、大学校訪問、砿学、化学、医学など見物
二十三日（九日）、陸軍卿大山巌主催の鹿鳴館夜会参席
二十七日（十三日）、印刷局訪問
二月一日（十七日）、外務省訪問、国事犯（日本に亡命した金玉均、その他の犯人）送還を要求
三日（十九日）、横浜灯台局見物
五日（二十一日）、天皇に帰国挨拶
七日（二十三日）、横浜に行き商船名古屋丸乗船出発
八日（二十四日）、神戸到着

九日（二十五日）、大阪、西京経由琵琶湖に着き見物後、夕方、神戸に戻る
十日（二十六日）、青竜丸乗船
十二日（二十八日）、赤間関到着
十三日（二十九日）、長崎到着
十五日（三十一日）、徳国商船乗船
十八日（四月三日）、釜山浦、済州島経由仁川到着

五　修信使の見聞あれこれ

朝鮮修信使たちの日本見聞記録は一種の情報収集を兼ねた報告書であるから、その中に個人的判断とか批判的見方はそんなに多くは出てこない。しかし、彼らが残した記録内容を読んでみれば、彼らの関心がなんであり、それをどういうふうに感じたのかを割りだすことができる。一般に、我々は初めてみる新しい物事に関心を寄せる。そして大体は正否、善悪、美醜のような二項対立的基準によって物事を判断する。当然、自分に慣れているとか、ごく平凡な対象にはなかなか

目が向けられない。朝鮮修信使たちの見聞内容もこのような基準に当てはまる。

彼らの記録は公式日程と事務に関する報告書的な内容を除けば、自分たちが直接見物した物事に対する情報収集的性格を見せている。それは当然新しくみえる対象に集中するしかない。明治初期の日本で彼らの目に新しくみえる物事があったとすれば、それは取りもなおさず西洋化による文明開化の流れであったに違いないと思われる。それは機械化であり、軍事化であり、あらゆる面に広がりつつある社会と制度の変化だったのである。先に掲げた彼らの日程を見れば見物内容もある程度見当がつく。これは多分日本側の意図的勧めによる結果であったと思われるが、これから彼らの目に映った見聞内容をいくらか具体的に拾ってみる。

修信使たちの観察記録は非常に詳しいので別に説明は要らない場合が多い。したがって原文を直接読みながら必要なところには適当な説明で補えば充分である。引用は一応読みやすい現代文意訳で示す。原文に現われる独特な漢字遣いは現代の語形と異なる場合が多いが、それはかえって新文明に対する修信使たちの理解度を知るうえで大切なのでなるべく活かすようにする。そのようなところにはその都度、理解を助けるために現代的表現や解説を括弧の中に書き添えておく。場合によっては文脈を少し補うこともある。日付は原文通りの旧暦である。

(1) 機械化と設備

むかしの通信使たちは帆船で海を渡り、大阪から江戸までは陸路でいったが、新時代の修信使たちは火輪船（蒸気船、汽船）に乗り大体は赤間関、長崎、神戸、大阪、京都などに暫く立ちよってから横浜に着き、そこで今度は火輪車（汽車）に乗りかえて東京へ向う。要するに彼らの機械化経験は火輪船と火輪車から始まったのである。

① 火輪船、灯明台、船着き場

修信使たちは草梁（釜山）あるいは済物浦（仁川）で日本の火輪船に乗り、初めて目にする蒸気船の規模と構造を注意深く観察している。

イ　（釜山で船に乗り）船の仕組みは見ても説明はできない。況や余は身持ちを慎んだので心行くまで見入ることもできない。一隻の船はすべてが機関であり、その内一つでも故障を起こせば船は動けなくなる。そういうわけで船の中には船を動かし、船を操る任務にそれぞれ担当者があり、その他にも何人かは油の壷と布切れを持ち、時々油を塗ったり拭いたりするから、銅の棒と鉄の鎖がいずれも鏡のように輝く。……（中略）……船の腰当たりには穴が開

いており、梯子で出入りができるようになっている。……（中略）……ここは船の機輪が集まっている所である。腰を曲げて見下ろすと船底が見え、その中には丸いもの、四角いもの、上は丸くて下は四角いもの、半月形、斜めに鋭いもの、少しちぐはぐになっているもの、かなりちぐはぐになっているもの、紡車がまわるもの、篩の枠が往来するもの、互いに摩り合いながらチュウチュウと音を出しているもの、などなどがある。船底はどこも油塗れになっており、釜のなかでは水が沸いているが石炭を焚く所は終に見当たらない

＜『日東記游』巻一乗船＞

（船に乗ってから）諸公と一緒に従船に乗って、黒巌の沖に到り、日人の火輪船に乗った。船の名は安寧丸、長さは三十三～四把（尋、約一・八メートル）、幅は五～六把程度に見える。帆は二つであり、外には煙筒が高く聳えており、内には廻っている汽輪が二つある（船内の輪は闇輪、船外の輪は明輪という。）船体の周りには鉄の欄干が掛けられ、舳先には時表と羅針機が備えられており、船窓は全部瑠璃であるが、その精巧さと豪華さは本当に初めて見る。船内の房（部屋）は三等に分けられているが、我らは上等に、随員は中等に、跟従（下人）は下等にはいり、卜物（荷物）は下層に置いた。上等部屋は五～六ヶ所あるが、一つの部屋は左右上

下が層になって四人がはいれる。余は洪公（英植）、魚公（允中）と同じ部屋にはいった。部屋の中には青と紅色の毯で造られた一重の掛け布団と、西洋木で覆った褥と枕、画の飾られた磁器洗面器、その他にも船中灯燭、茶器、卓床、花瓶など備えていないものはない＜『日槎集略』巻地四月八日＞

ハ　船を着ける海岸には必ず石を築き上げて橋を架け、時には水門と虹の橋（太鼓橋）を設けている。また、長い土手を造り、水を遮っているので、まるで湖のようになっている。その中に船を泊めるから波浪の心配は要らない。こういうわけで兵船と大船が密集し、その帆柱が恰かも林のように見える＜『日東記游』巻一停泊＞

ニ　国内に軍艦は三十五隻あるが、その中に堅完なものは十六隻に過ぎず、残りは全部朽敗して用に足らず、商船は三百隻ある。それから横須賀ではただいま軍艦を造っているという＜『東槎漫録』巻末東槎記俗＞

日本人が蒸気船を初めて持つようになったのは一八五五（安政二）年八月で[4]、オランダ国王が幕府の長崎海軍伝習所に演習艦スンビン号（のち観光丸と命名）を寄贈した時からである。その後の相当長い期間は蒸気船を輸入してきたが、一八

七一（明治四）年二月、横須賀製鉄所（四月に横須賀造船所と改称）の第一期工事の竣工に伴い[5]、次第に蒸気船の自国生産体制を整えるようになる。そして一八七五（明治八）年二月からは、三菱商会の蒸気船が上海～横浜間の運行を開始するが、これが日本初の外国航路運行である。反面、朝鮮人の手に蒸気船がはいったのは一八八三年のことである。翌年にはジャーディン・マディソン商会が上海～仁川（長崎、釜山経由）間の航路を開設、南京号で運行を開始している。

そういうわけで修信使たちは初めて蒸気船に乗り、その構造と設備に深い関心を見せている。イは一八七六年の黄竜丸の機関室、ロは一八八一年の安寧丸の船室内部を綿密に観察した記録である。いかにも解りやすく、しかも細かく描かれている。それほど彼らの目を引いたのであろう。当時の朝鮮にはそういう新文明設備がなかったからである。因みに、ハは船着き場すなわち波止場の構造に関する記録であるが、こういう設備も修信使たちには関心の的であったに違いない。最後のニは一種の情報として記録したものであろう。実際、横須賀造船所では一八七七年六月、日本初の軍艦清輝を竣工しているので、一八八五年に朴戴陽が軍艦製造の話を聞いたとしてもおかしくはない。

② 火輪車、鉄路

蒸気船のつぎに修信使たちの目を引いたのは汽車である。最初の修信使金綺秀は横浜から新橋（いまの東海臨海新交通の汐留駅）までを汽車で往復するが、その後の修信使たちは大体神戸から大阪まで、そこからまた京都あるいは大津までも汽車を利用して見物に出かける。そこで彼らは汽車をいろんな角度で観察し、記録に残したのである。

イ　横浜から新橋までは火輪車に乗った。……（中略）……火輪車が既に駅楼で待っているというので、駅楼の外に出て、閣道（廊下）の端まで歩いても車は見えず、四～五十間（広さの単位、一間は二・三三三平方メートルあるいは二・九九平方メートル）位の長廊が道端にあるのみである。車はどこにあると聞いたら、それが車であるという。長廊のように見えたのが車だったのである。火輪車の仕組みは、先方の四間程度の車輛に火輪があって、前に機関が備えられ、後に人を載せるという。残る毎車は三間半で、三間は屋（部屋）、半間は軒（乗降口）である。一車一車は鉄の鈎で繋がり、それが四～五車乃至十車に至るから、すなわち三～四十間、四～五十間にもなる。人々は軒から

乗り降り、屋に座る。外は文木（模様のはいった板）、内は皮と毛布（ビロードの意味）などで飾られている。両側は椅子のように高く、中間は低く平たいので、向き合って座れば、一屋には六人あるいは八人がはいれる。傍は両方ともに瑠璃で遮られ、装飾が玲瓏なので目を奪おうとする。車ごとに車輪があって、前車の火輪が一転するに伴い、衆車の車輪がみな転び、雷電のように走り、風雨のように突っかかるので、一時刻で三～四百里（朝鮮の一里は〇・四キロメートル）を走るという。しかし、車体は安穏で少しも揺れない。左右からは山川、草木、屋宅、人物が見えると雖も、閃光のように過ぎ去るので、掴めにくい。喫煙一服、お茶一杯の間に最早新橋に着いたので、すなわち九十五里である。

火輪車は必ず鉄路の上を行く。路は甚だしい高低がなく、低い所は補い、高い所は平らにしたからである。車輪の当たる両側には片鉄を敷いたが、その外側は仰ぐような形、内側は俯せるような形になっているので、その軌から車輪が外れることはない。路は一様に直線ではなく、時々旋回するが、そこも巧く通るのでやはり困ることはない。路面の舗鉄もまた必ず二面（複線）なので、こちら側の車が前の方へ進み、あちら側の車が向かい合って進んで

きても互いに妨げにはならない。往く車と来る車は必ず方位があって、来るのは左側、往くのは右側である。もし車が互いに出逢うとか一時停車する時には、挨拶を交わす。こちら側の車が四〜五十間であれば、あちら側の車も四〜五十間である。こちら側の一屋一屋は前後が遮られていて、互いに干渉はできないが、あちら側の一屋一屋はこちら側に座って見ることができる。一屋には丈夫（男性）、一屋には婦人、一屋には本国人、一屋には外国人が乗るので、一屋ごとに異なる。両側の人々が顔を合わせ、お互いに挨拶を交わすやいなやの内に、（車は）火を噴きつむじ風のように去る。一瞬に見えなくなるから、ただ頭を掻き言葉を忘れ、名残惜しくも驚くばかりである＜『日東記游』巻二玩賞＞

（神戸〜大阪間）諸公と一緒に鉄道局へ行き火輪車の造作工程を見てから、火輪車に乗るため待合所に集まった。午正（正午）、火輪車に乗る。発つ時には盪箭一声（汽笛）があり、よって鉄路の上を走る。路は平らで、真っ直ぐな鉄が四条（線）あるいは六条敷かれており、分路（分かれ道）には（それが）斜めになって横を向いて敷かれている。舗鉄の形は丸く、上の方に伸びた部分が一握り程度であり、車輪の半分はその上に置かれ、火気にしたがって雷

電のように走る。車の上に板屋があり、その中に椅子と卓（テーブル）を置き、その間間は窓鏡（窓ガラス）になっている。一屋の中には十五～六人が座り、上中下の三等別にこのような屋がある。通り路に鑿山通路（トンネル）が三つあって、そこを通る時には闇が漆のように暗い。また、鉄の欄干が付けられた長橋が七～八ヶ所ある。三宮、住吉、西宮、神崎（いまの尼崎）の四ヶ所で暫く停まるので、車に乗る人はそこで待てば、乗り降りできるという＜『日槎集略』巻地四月十七日＞

ハ　飯後午初（十一時）、西京鉄路所で火輪に乗り琵琶湖に向う。稲荷と山科を通り過ぎ大谷に到ると長さ数馬場（長さの単位、一馬場は〇・四キロメートル）程度の鑿山通路（トンネル）がある。ここを通る時は、車内に灯火を掛けた＜『日槎集略』巻地四月二十四日＞

ニ　横浜行きの船を待ちながら、神戸に泊まっている内、欝陶しい気分に耐えられず、一行は大阪へ行き遊覧することにした。腕車（人力車）に乗り駅逓所に着く。すなわち停車亭である。輪車がここに到り停車すると行人たちは乗ったり降りたりする。十里（一里は〇・四キロメートル）または二十里ごとに必ず停車処があるがそこには男女別、上中下等別の待合所がある。恐らく車に三

等級の処所があるからであろう。車がまだ到着していない時に行人たちはここで待ちながら車標を買う。標は紙で造られ、等級の他にどこからどこまでという文字が印されている。それから門（改札口の意味）を出ようとする時、その欄干には藜鉄（一種の防備具）が架けられ、辛うじて一人が通り抜けるようになっている。守門者が剪刀を持って傍に立ち、行人が門に臨み標を見せると、守門者は剪刀で標の一隅を切りとってから返す。いよいよ行人は門を通り抜け、車に乗って目的地に到ると降りる。門から出ようとする時、再び標が証拠になる。もし標をなくすと、さらに車賃を払う。

十点鐘（十時）、火輪車に乗る。車の仕組みは、前には火筒、半ばには車屋、後ろには粧物（貨物車）がある。大きい時には車の屋数十輪、載物車十余輛もある。互いに牽制するから、その機関を動かすと汽が生じ、煙を噴きながら、前が引けば後ろは付いて行く。ゆっくり行くことも速く行くこともできるが、それは機関をどう操るかによる。故に、緩（普通）とか急（急行）という。

鉄路で大阪に着いた。百里の距離を一時（間）で走ったのである。途中、山川風物はみなあまりにも速く過ぎ去ったが、ここに到り初めて原野が広く開かれ、田疇（田地）が平らに広がっているのを見た〈『東槎漫録』一八八四

年十二月二十九日〉

横浜〜新橋間二十六キロメートルに鉄道が開通されたのは一八七二（明治五）年九月であるが、これが日本初の鉄道である。更に神戸〜大阪間は一八七四（明治七）年五月、それから大阪〜京都間は一八七七（明治十）年三月、京都〜大津間は一八八〇（明治十三）年七月にそれぞれ鉄道が通っている。反面、朝鮮に鉄道が初めて開通されたのは一八九九年九月、済物浦〜露梁津間三十三・二キロメートルである。そういうわけで修信使たちは日本で初めて汽車に乗り、実物を目にしたのである。彼らが汽車を細かく描いているのはそのためである。

イには汽車の構造、走りぶり、鉄路の仕組み、客室の内部構造があたかも画のように描かれており、ロとハにはトンネルの話がみえる。ところで、ロにみえる阪神間三つのトンネルのうち、一つは恐らく石屋川トンネルで、一八七一（明治四）年七月に貫通された日本初の鉄道トンネルであり、ハに出てくるトンネルは恐らく逢坂山隧道で、日本人のみの手による最初のトンネルでもある。鑿岩機試用で一八八〇年六月末に貫通されたのだから、七月の京都〜大津間鉄道開通直前のことである。そういうわけでこの二つのトンネルは、それぞれ日本鉄道史上記

念碑的な存在であるが、李鑢永は両方を通りながらもトンネルそのものには大した関心はあまりなかったようである。トンネルに関する知識をほとんど持っていなかったからであろう。一方、二には切符の役割と取り扱いが浮彫りになっている。このような記録は彼らが一種の情報収集として汽車に相当な関心を寄せた証拠となろう。

因みに、京浜間鉄道で日本人機関士が運転を始めたのは一八七九（明治十二）年四月からのことである。それまでは英国人が汽車を動かしたので[6]、当然金綺秀が乗った時も外国人機関士が運転したはずであるが、金はそれに気がつかなかったようである。もし金がそれをわかっていたら機関士を汽車から降ろすよう要求したかも知れない。なぜなら、彼は後日、帰国途中の船に西洋人航海専門家が乗っているのを見つけ、結局彼を船から降ろさせた事実があるからである。その経緯についてはのちほど改めて触れるが、とにかく金はそれほど西洋人を排斥したのである。

③ 電信、電線、電信柱

修信使たちは日本で電信の不思議さを経験する。当然、彼らはその仕組みに注

意を集中しながら細かいところにいたるまで見つめている。つぎのような記録がそれをものがたる。

イ　工部省では兵器と農器と各種の器械を製造するが、暫く見ただけなので思い出せない。いわゆる電線というのはいくらよく見てもなかなか表現できない。……（中略）……工部省でこれを見ると電信線の端が建物の中に入っているのが、恰かも我が国の舌鈴（軒に着けて置く鈴）の紐が家の中にはいっているのと等しい。（電線を）床の上に垂らして、そこに機を設置し、その傍には櫃のような器があって、その中に電があるという。手でその機を敲くと櫃の中に電が生じぴかっと閃きながら、線に沿って直ちに上る。傍にはまた一つの器があるが我が国の大工の墨縄筒（墨壷）に似ている。その中では木の棒が廻っており、傍にはまた紙巻きがあって、その一端を木の棒が巻き上げると、紙の上に字が現われる。横に置いてある紙捲きを広げるとそこにも字がある。これはこちら側からあちら側に報じる文である。……（中略）……電線連絡の柱（電信柱）は道路のあちこちにある。長さ三〜四丈（一丈は三三三センチメートル程度）の真っ直ぐな木の上に磁器の杯を載せ、その上に線を架けて置く。

柱ごとの線も一つだけではない。それが立っている場所もあちらこちらにある。ある所は多く、ある所は少ない。遠近も一様ではない。それはそうならざるをえない。山野に遇えばそれを高めるとか低める。大海に遇えばそれを水の底に沈めて通すという〈『日東記游』巻二玩賞〉

ロ　神戸から大阪へいたる歴路には電気線鉄線が多い。（線は）一から二、あるいは三から四、または十七に至り十一、十二になる場合もある。そのところどころに木の柱を立て電線を架けたのである〈『日槎集略』巻地四月十七日〉

ハ　（工部省電信中央局で）電信および鉄道、鉱山に関わる数多くの工作機械を順次に見物した。電信とは大体鉄線が何千里の外まで延び、もし互いに伝えたいことがあれば、洋書二十六字をもって機を敲きながら、こちらで書けばあちらが応じるので、何千里離れた所でも互いに通じる。通じるというのは気の引力であり、引くというのは薬水の作用だという。蓋し、鉄線と薬水は電信の第一機であるが、その機の奇妙な作用は形容しがたい。関わりがあって互いに通じる所には悉く機を設けているが、（その数）三十余所に至り、機ごとに一人の担当者があるという〈『日槎集略』巻地五月十三日〉

ニ　電信局を見た。局長工部大書記官石井忠亮が迎えてくれる。漢文で「欽差

正月一日抵東京」という九字を局中の人に託して釜山に寄せしめる。ついでにそれを言葉で本国の京城に転達するよう頼んだ。電信を扱う人が目では字を見ながら手で器械を操ると、器械は手に従い高くなったり低くなったりしながら、その都度音を出す。恐らく手の動きが高くなったり低くなったりする時、自ずから機関は文字と言語を万里の外へ通知するのであろう。暫くしてまた釜山の陰晴を聞いたが、それは午前十一点鐘であった。こちらの天気は清明であるが、釜山はいま曇り、風が吹くので雨が降るだろうという。ここから釜山までは六千余里である。万里の陰晴が同一である可能性はないと雖も、一時（間）足らずで互いの声息が通じるので面喰らうようなものであり、魔法使いの嘘のようでもある。しかし、従前の経験から見ると一点の錯誤もなかったので、西洋の法、人を眩惑させるのがおおかたこの通りである＜『東槎漫録』一八八五年一月十四日＞

日本では一八六九（明治二）年八月、横浜灯明台～横浜裁判所間に電信線が架設され、ブレーゲ式指字電信機による通信実験にも成功している。そして同年十二月には東京～横浜間で電信が実用化される。(7) その後、一八七八（明治十一）年に

は工部省中央電信局が東京木挽町で業務を始める。この頃までは全国重要都市に亙る電信網も整えられたわけである。一方、朝鮮に電信が通るようになったのは釜山～長崎間の海底電線開通によるもので、一八八四年二月のことである。したがって、修信使たちが日本で電信をみて不思議に思い、関心を寄せたのは当然のことである。上に引いておいた彼らの記録に当時の様子がはっきりと現われている。中でも長崎～釜山間に電信が開通された後、日本に渡った朴戴陽は、工部省中央電信局を訪問した際、釜山との交信を直接経験する。六千余里も離れているところで嘘つきのように声息が通じるのをみた彼は、「西洋の法、人を眩惑させるのがこの通りである」と書き残している。これが否定的見方なのか、驚きなのかは断定できないが、他のところに時々出てくる彼の保守的態度を合わせてみる時、多分否定的見方に近いと解される。

④ 写真、写真機

それまでの肖像画といえば絵師が描くものだけだったが、最初の修信使金綺秀は機械で写す真像を日本で直接経験する。その様子をつぎのように観察している。

イ　ある日、館伴官が来て余の真像を写すというので、再三拒んでも余の話しを聞かない。ふと見ると、遠く木の上に架けられている四角い鏡が、恰かも我が国の鶏塒（止まり木）に似ている。木の柱四つを高く立て、その上に鏡を設置したのだが、鏡は四角い櫃であり、その表は明るい鏡である。上は布切れで覆われ、後ろには穴があるようだが、何物かで遮られている。遮られた物を若干外し、手で中を探るともう一つの鏡が通りすぎる。暫くたって鏡をもってきて余に見せる。余の顔がその中にある。鏡からは水が流れ落ちるかのように見えるが、櫃の外側の鏡は依然そのままである＜『日東記游』巻一留館＞

ロ　午間（十一時～午後一時）、写真局へ往き写真を撮った。厳令（世永）、沈令（相学）、五衛将（金鏞元）も同行して一緒に撮った。本局主人は鈴木攘雲である＜『日槎集略』巻地七月三日＞

ハ　（神戸で）副使とともに写真局へ往き影を照した＜『使和記略』八月二十一日＞。（大阪で）副使金校理（晩植）、徐従事官（光範）と一緒に写真局へ往き影を照した＜『使和記略』八月二十七日＞。（東京で）写真局に往き影を照した＜『使和記略』九月十五日＞

日本では早くも一八六二（文久二）年、横浜と東京に写真館があらわれ、幕末・開化期の激動する社会を写し、いまに残る多くの幕末の志士たちの姿は上野で撮影されたという。(8) 朝鮮に写真技術がいつはいったのかはまだ詳しく調べていないが、一八八五年四月、統理交渉通商事務衙門は日本から輸入される写真器械、紙属、薬種などの物品に対して免税措置を取っているから、少なくとも八〇年代初期にはすでに写真機がはいっていたと推定される。なぜなら一八八一年の紳士遊覧団は、ロで分かるように写真局へ往って写真を撮り、主人の名前まで記録しながらも、写真機とか写真技術にはなんらかの関心も示していないからである。その後、一八八三年の修信使朴泳孝もまた、ハから分かるように神戸と大阪と東京でその都度写真館に往き、前後三回に亙って写真を写しながらも、なんの説明もなしにその事実だけを簡単に書き残している。彼らが日本で写真館に往ったのは、恐らく記念写真を撮っておくようにと、誰かに勧められたのであろうが、写真を撮りながらも平気であったという事実は、以前から写真に関する知識を持っていた証拠に他ならないと思われる。反面、一八七六年の修信使金綺秀は初めて写真を目にしたのであろう。だから彼はイのように写真機の不思議さに関心を集中している。

⑤ 造幣局、印刷局

経済活動に欠かせない貨幣製造も近代化の代表的象徴の一つであるから、日本側は慣例のように修信使を造幣局に案内したようである。しかし、修信使たちは造幣の大切さをあまり実感しなかったようにみえる。彼らが残した記録が意外に簡単なのはその証拠ではないかとみなされる。ただし、朴戴陽だけはいくらか詳しい記録を残しているが、実際は造幣過程を観察した内容ではなく、それを批判的観点から論じた内容である。いかにも朴ならではの態度であるともいえる。

イ　造幣之局は所々にあって、金銭と銀銭は当百銭と当千銭の役割を担い、紙幣一枚はその価値が一万銭にもなる。これをまた毎日のように作って止まないという〈『日東記游』巻三政法〉

ロ　（大阪で）飯後、造幣局に往った。三つの門を順次に潜ったが、その内の両門には鉄箭が挿されている。局舎は非常に広く、何百間であるか知るよしもない。火輪で金銀銅三品の銭を鋳、銭は大小があって半銭から一～二銭まであるが、金銀（銭）はなく円があるのみである。一角で銭の形を造ると、一角では磨いてつやを出し、一角では字を印す。立ち見している内に数斗になる。

一日中造り上げる大小の数はそれぞれ三万であるという〈『日槎集略』巻地四月十九日〉

ハ　（大阪で）造幣局、機器廠工作鍛練などに往ってみた。造幣と製器はいずれも西法を学んでその速度が速いし、利益も多いから、富強に達するのは当然であろうが、国内が空虚であり民生は憔悴であるのはなぜであろうか。利を追求するのは充分であるが、その利は外国に流れるし、兵を治めるのはまめまめしいが、その兵は大本（農業の意味）を害するので、こうして国富を達成するとか、兵を強くしうるなんて余には信じられない〈『東槎漫録』一八八四年十二月二十九日〉

ニ　（東京で）午後、印刷局に往ってみた。すなわち紙幣を造っている所である。おおかた紙幣を使用する法は銀金との価値が互いに一致しなければならない。例えば、金銀銭一万円を蓄えば紙幣一万円を造る。紙幣は、結局、必ず金銀銭で換給するから、それ以上の加減があってはならない。我が国の銭標去来（いわゆる於音）に等しい。しかし、我が国の銭標は私的手段なので、銭標をお金に替えてからでないとお金として流通できない。反面、紙幣は公的手段なので、紙がそのままお金として流通されても差し支えはない。しかし、現在日邦の紙

幣は溢れるのに対し、金銀は縮まっているので、もし紙幣を金銀に替えようとしても兌換という文字は紙の上の空文に過ぎない。鋳てあった金銀銭は悉く外国の商利として国外に流れて行くが、民はその術に騙されながらも、愚かでそれを知らない〈『東槎漫録』一八八五年一月二十七日〉

日本は欧米諸国に匹敵する新貨幣を造る機関として、一八七一（明治四）年二月、大阪に造幣寮を設ける。それから同年七月には、大蔵省内に紙幣司を設け、一ヶ月後にはその名称を紙幣寮と改め、紙幣と公債証書の発行を始める。一八七七（明治十）年一月、紙幣寮の名称は紙幣局と変わり、さらに翌年十二月には印刷局と変わる。(9) 要するに紙幣寮の開業によって紙幣の国内製造が可能になったわけである。

しかし、朝鮮修信使たちは先に指摘した通り、日本の造幣業務に対して積極的な興味を示していない。実際、イの文脈から判断する限り、金綺秀は造幣局を見物しなかったようである。彼は帰国途中、当時の外務卿寺島宗則から一通の手紙を受けとる。船が神戸で二昼夜滞泊するから、汽車を利用して大阪の造幣寮を是非見物するようにとの懇切な勧めであったが、あいにく体の具合いが悪くなった

ので見物をあきらめる。結局、大阪の造幣寮と東京の印刷局を直接訪ねたのは金綺秀以後の修信使たちで、ロとハとニはその時の見聞記録である。ことに、朴戴陽は富強の手段である造幣の大切さを認めながらも、その問題点を鋭く指摘している。当時の日本の現実を率直に警告した発言ともいえよう。

⑥ 造船所

一国の経済面だけではなく、軍事面に於いても大きな役割を果たすのが造船技術である。だから日本側としては修信使に是非見物してもらいたいところが造船所であったに違いない。しかし、一八七六年の金綺秀は帰国途中、横浜を出発した船が横須賀で一泊するから、造船所を見物するよう勧められたが、病を言い分けに船から降りていないし〈『日東記游』巻一停泊〉、一八八一年の紳士遊覧団のうち、趙令（秉稷）、洪令（英植）、魚公（允中）は、横須賀の火輪船製造所を見物したが、李鑢永は他の仕事があって、一緒に往けなかったという〈『日槎集略』巻地六月十八日〉。結局、今度の資料からは造船所見物記録としてつぎの一つしか拾えない。

（横浜を出発して帰国途中、横須賀の造船所に立ちよる）船を造っている規模が奇妙でありながら非常に大きい。火輪艦一隻ごとにそれぞれ石閘（ドック）を築き、（船をその中に）泊めて置いたが、一つの閘を築く費用は五十万円にもなるという〈『使和記略』十月二十六日〉

早くも一八五三（嘉永六）年、アメリカの東インド艦隊司令官ペリーが率いる軍艦、いわゆる黒船を浦賀沖でみた日本は、造船所建設に力をいれ、一八六五（慶応一）年九月には、横須賀製鉄所の着工に漕ぎつけ、翌年五月には最初の修船台（曳き上げドック）を竣工する。一八七一（明治四）年二月、第一期工事を終え、製鋼、錬鉄、鋳鉄、製缶の各工場および修理用ドックを設置した横須賀製鉄所は同年四月、その名称を横須賀造船所と改め、本格的な造船体制を整える。しかし、朴泳孝は先の引用文から分かるように、日本の造船施設と技術に対しては大した関心をみせていない。実際、彼は開化志向性の持ち主でありながらも、日本の文明施設に関心をみせたことはほとんどない。その代わり競馬や夜会や晩餐会は彼の記録に漏れなくあらわれるようである。

⑦ 造紙所

修信使たちは、これから取りあげるいろんな文明設備にも関心を寄せている。特に、瓦斯設備と灯台に対する彼らの深い関心が注目を引く。

（大阪で）諸公とともに造紙局へ往くと、本局の（官）吏真島襄一郎が茶果を勧める。いよいよ造紙所に行ってみると、火輪をもって機械に潅水しており、紙本には綿、布木、苧、絹織り、毛革、根皮などいろんな破片雑物がある＜『日槎集略』巻地四月十七日＞

⑧ 紡績所

（大阪で）紡績所に行ってみた。男女が一緒に集まっており、ここもやはり火輪で綿を打って糸を造っている。おおよそ造紙も紡績も非常に速くなされるので形容しがたい＜『日槎集略』巻地四月十七日＞

⑨ 瓦斯局、煤気局

イ　（横浜で）申後（午後四時頃）、趙令（秉稷）、高主簿（永喜）と一緒に瓦斯局

へ往った。この局は煤気の機器を設備する所であるが、煤気は石炭を焼いた煙である。横浜内各地の燃灯はこの煤気によるものである。油でも蝋燭でもないのに毎夜火が点り、暁に至って消される。ただ、火を付ける時には、人が他の火を灯内の芯に近づけ、消す時には芯を低めるのみである。横浜内の街路辺には鉄柱を立て、瑠璃灯を懸けており、家の中には鉄機を設け、そこに瑠璃灯を懸ける。街路辺の灯は五百、家の中の灯も五百あるが、毎一灯の火価は毎月四円だという。更に、煙を貯蔵する桶と袋もあるが、袋は革で造られる。四方を全部縫い、上段の中間に小さい穴を開け、これを鉄で飾って置く。その他にもまた、革紐があり、その周りの太さは縄位だが、長さは二尺程度で、中は空っぽになっている。この革紐の両端をそれぞれ煙の桶と袋の入り口に挿し込めば、煙が紐を通って袋の中にはいり、袋は膨れ上がる。適度な量を袋に入れて売ると、値段は三〇銭であり、一晩中の灯火を充分に付けるという。瓦斯局の石川善三が巧みに解いてくれた＜『日槎集略』巻地六月十三日＞

ロ　煤気局は海辺にあり、煤気を盛んに造っている。東京内の所々にある煤灯はみなこれによって燃えるのである＜『東槎漫録』一八八五年一月十四日＞

日本の場合、文明開化の象徴的な存在としてガス灯が初めて点ったのは横浜で、一八七二（明治五）年九月のことである。その後、一八七四（明治七）年には東京にもガス灯が点り、やがて全国に普及していったという。[10] そういうわけで、イに出てくる小売り用ガス袋の話には当時の様子が面白く描かれてある。

⑩ 灯台局

航海の安全を図るための洋式灯台も新文明の産物の一つに違いない。それが修信使たちの目に珍しく見えたのは当然である。ただ、金綺秀は船の上で灯台を眺めたが、朴戴陽は横浜まで出かけ、それを詳しく観察している。恐らく、そこで旗による手信号の存在も初めて聞いたのであろう。

イ　山の麓には時々白い建物が見える。これを灯明台という。夜にはそこに灯が点り、船路を明るく照らすので、闇の中でも道に迷う心配はなくなる〈『日東記游』巻一停泊〉

ロ　横浜に灯台局があって、局長が灯台を見物するよう欽差一行を招いた。上午九点鐘、横浜に往ってみた。灯室は瑠璃で造られ、大きさは鐘程度で、そ

の中は十余人もはいれる位であり、高さは二丈程であるが、幾層に重なり、魚の鱗みたいに繋がっている。石油を炊いて火を付けるのだが、灯が廻れば火炎は山のようになり、角が廻れば火の色が変わる。おおよそ灯は層になっているので火勢はもっと長くなり、角があるから火の色が変わる訳である。灯は三階の台の上にあるが、台は我が国の十字閣（矢倉）の制度と同じであるが少し大きい。真っ直ぐ海上に臨んでいるので、夜に火を付けると数百里の外を往来する輪船に風浪と暗礁を照らすことができるという。なお、各種の旗による信号があって、百里の外からも互いに問答ができる。もしある件について聞こうとすれば、一定の旗を挙げ、答えも同じく順次旗を挙げると、一場の談話になるという〈『東槎漫録』一八八五年二月三日〉

日本最初の洋式灯台は一八六九（明治二）年一月に現われた。横須賀近くの観音崎灯台がそれである。同年にはまた、野島崎（千葉県）に、その翌年には樫野崎（和歌山県）に、翌々年には佐多岬（鹿児島県）と剣崎（神奈川県）にもそれぞれ灯台が設置される。こうして明治初期には既に全国三十ヶ所以上に灯台が設置されたという。[11] 金綺秀が日本でどこの灯台を見たのかは定かでないが、横浜に着く

までは所々でそれを見掛けたのであろう。船の上で見たのでその機能だけを簡単に記録している。反面、朴戴陽は灯台を直接見たのでその構造と機能をいくらか詳しく描いている。

⑪ 人力車

修信使たちが日本で初めて経験した乗りものの中には人力車と馬車がある。人力車は日本独自の発明品であるが、馬車は開港以来西洋から習った乗りものである。それを珍しくみた金綺秀はその仕組みと走りぶりを相当詳しく観察したのである。

延遼館の前には数えきれない程多くの人力車がある。人力車は両輪で、車輪の間に席を設け人を坐らせるのだが、もし二人が坐ると肩が互いにぶつかる。幕があって後ろは高く、両側は低いが、前にはそれがない。幕の後ろには襞畳（蛇腹のようなもの）あって、雨が降るとか日差しがある時には、（これを）広げて覆うと屋根の付いた乗り物になる。車輪は二つの木棒で支えられ、前の方に延びており、（それが）格子のような秤竿になっている。格子の

中に一人がはいり、秤竿を胸に当て走るので、飛ぶような速さである。随員はみなその上に乗っている〈『日東記游』巻一留館〉

東京で人力車の営業が始まったのは一八七〇（明治三）年三月のことである。それが一年後には一万台以上になり[12]、一八七四～五年頃には上海や東南アジア地域にも輸出されたという。[13] しかし、金綺秀は東京でそれを初めてみたのであろう。

⑫ 馬車

馬車は一つの長い乗り物で双馬が引く。四輪で前は低く、後ろは高い。その上に屋を設けたが、屋根が高く、四面は瑠璃の窓になっており、左と右の方は自由に開けることができる。人が乗り降りする時には車に付いている階鉄が恰かも馬の鞍の鐙のような役割を果たす。車の中には前と後ろに床があるが、油の光彩が燦然である。二人ずつ向い合って四人が坐れるが、十数人が坐れるものもあるという。車の外側の前後には御者（馬丁）の坐る席があって、（馬丁は）そこに坐り手綱を握るようになっている。そして手綱を調節しながら馬を速く、あるいはゆっくり走らせたり、方向を左か右に向けるのも

思うがままにできる〈『日東記游』巻一留館〉

日本で二頭立ての馬が引く馬車が営業を始めたのは一八六九（明治二）年三月のことである。横浜～東京間を走った馬車は六人乗りだったので、当時は乗り合い馬車と呼ばれた。しかし、一八七二（明治五）年九月、横浜～東京間に鉄道が通ってからは乗り合い馬車もその使命を終えたものの[14]、その代わり、一八七四（明治七）年八月には浅草～新橋間を走る二階建ての大型馬車が一時現われたが、まもなく軽便な乗り合い馬車に代わり、その名称もガタ馬車または円太郎馬車と呼ばれたという。[15] そういう時期に東京で二十日間泊まった金綺秀が実際に乗ったのは、四人乗りだったようで、一般の円太郎馬車ではなく特別に用意された公用馬車ではなかったかと思われる。燦然たる内部の構造まで分かっているのがその証拠になる。いずれにしても彼は馬車を細かいところまで描いている。それほどの関心を寄せたのである。

(2) 軍事化と操練

明治初期の日本におけるもう一つの国家的目標は強兵である。そういう意味か

ら朝鮮修信使たちが新式軍事訓練に案内されたのは当然のことである。

① 陸軍操練

陸軍省操練場で修信使たちがみたのは制式訓練と歩砲騎兵の共同実戦訓練であった。

イ　陸軍省内には広場があって、木柵に囲まれている。陸軍卿以下諸官が余を迎え椅子に座った。最初に歩軍を試した。歩軍は一組に五名、十名ずつ立っているが、一隊には必ず隊長があり、手には標旗を持っている。更に、一騎将があって往来しながら角（ラッパ）をもって指揮する。角声が一度鳴るに従い旗がそれに応じ、旗が動き出すと衆軍もまた動く。前へ進む時も、後ろへ退く時も一斉に動く。抜剣挿剣、挙銃植銃、だれ一人先にするとか後にするものはない。左から出て右へはいり、右から出て左へはいったり、前から出て後ろへ退き、後ろから出て前へ進んだりもする。あるいは走りながら通り過ぎたり、囲んだりするのは、まるで常山の蛇（『孫子兵法』九地篇にみえる陣勢の喩え）のように、腰と腹が攻められると頭と尻尾が来て救援する。

次は馬軍を試した。……（中略）……軍士は皆壮健ですばしこく、腰には剣を佩き手には槍をもっている。身を飛ばして馬に乗り足で鐙を激励すると、馬は飛ぶように走る。緑茸芳草の地上からは動いている四つの馬蹄がちらりちらりとみえるのみである。一回は前へ一回は後ろへ、命令にすこしも違わぬのは歩軍と等しい。

次は車軍を試した。戦車は両輪で駟馬がそれを引く。上に一将が坐り前後を軍兵が護衛する。後ろには鈎で繋いだ小車があるが、それは自由に切り放したり繋ぐこともできる。前には大砲を据え後ろには薬筒があるがいずれも銅製である。一度馳逐しながら一斉に砲を打つのだが、砲が所指にしたがって動くと砲声は大野を揺るがす。また砲を背負った馬がその後を追っているので、放砲に臨んでは砲を地上に降ろし一斉に打つのだがすこしも食い違いはない。命令通り進むとか退くのは馬軍と同じであるが、但しその陣法はあくまでも長蛇が地を捲くような気勢である〈『日東記游』巻二玩賞〉

ロ　いよいよ陸軍操練場へ行き、操練を見た。四人の隊長が歩兵二～三百名を率いるが、それぞれ銃剣をもって隊列を作り、行陣しながら喇叭を吹く。隊長は口で指揮しながら、座らせたり、立たせたり、進ませたり、退けさせた

りしても、衆軍は少しも違わずそれに応じる。丘の上に敵陣を設け、砲を打ちながら互いに応戦している内に、馬兵は馬車に大砲を載せ、陣を成して四～五回砲を打った後、車輪を外して大砲と共に馬に載せ、急いで引き上げる。これで追ったり追われたりしながら、戦って勝利を決める格好を作るのである。行陣も破陣もただ喇叭一つによってなされ、銅鑼や太鼓や旗幟による指揮は勿論ない＜『日槎集略』巻地四月十九日＞

②海軍操練、競漕

海軍省では大砲発射訓練の他、隅田川で行われた競漕をみている。

イ　海軍省では大砲術を見た。海岸に一屋があって、両側の頭部は細く腰部は広く、いずれも船のように見える。中へはいると十数ヶ所の戸が開いていて、恰かも船窓に似ている。窓の前には必ず機輪を付けた大砲が置いてあり、窓口を向いている。窓の左と右は真っ直ぐ斜めになって、それぞれ砲輪に当てる鉄路二条が設けられている。砲が左へ動けば左で支え、右へ動けば右で支える鉄道がある訳である。この時、一人は手に小旗を持ち、窓に近づき敵の

様子を窺察し、もう一人が角（喇叭）を吹きながら信号を送ると、七～八人は（火）薬を載せて火を付けようとする。敵を窺察する人がいきなり手旗で右を指すと吹角もそこに応じる。放砲人たちが砲輪を推して右へ廻せば、砲口は窓に向けられる。只今、砲を撃とうとする所で、窺察者が改めて左を指し、角声が鳴ると、直ちに砲輪を推し廻す。砲躰が左に移されても砲口はそのまま窓を向いている。蓋し、左右前後に動く砲輪に合わせて鉄路を敷いたのはこのためであったのである。敵を左右から窺い、動きに合わせて撃つのだが、今のこの習放（発砲練習）は敵に臨んだ時と違わない。七～八人が同時に力を合わせ、推すもの、整えるもの、（弾）丸を運ぶもの、火（薬）を載せるものがそれぞれ自分の役割を果たすので、手と脚は忙しく動き廻り、一呼吸の間に諸砲一斉に発砲され、その音は山海を揺さぶり、両耳がぼやっとする。発砲に臨み伝語官二人が余の坐る床の両側に近より、余をしっかり掴む。余が驚き、揺さぶられるのを心配したからである。そこで余は笑いながら言った。「余、今少し疲れているとは雖も、最早不動心の年（四十の年、出典は『孟子』公孫丑上）を過ぎている。若干の砲声の類がいかにして余を動かせるのでしょうか」＜『日東記游』巻二玩賞＞

□　隅田川吾妻橋水戸邸の前で海軍競漕があると、外務省が五辻長仲を送り、見物するよう要請するので諸公と一緒に行ってみた。海軍大尉曾根俊虎と海軍の秘書堤従正が迎えてくれる。一大の火輪船が旗幟を掲げ、碇を降ろしている中に、一船ごとに海軍六名あるいは十二名が乗っている小船が見える。一船の軍は紅巾、一船の軍は黄巾、一船の軍は青巾、一船の軍は白巾を着けており、それぞれ船の左右に分かれて坐り、櫓を握っている。大船で砲を撃つと、四つの軍船同時に放流して、二十丁間を往来しながら、互いに先を競う。往来の時、審査官が船に乗って後を追いながら、その遅速を調べる。速いものには賞があり、遅いものには罰がある。先に着いた時には船から砲を撃つ。こうすること十四回が終ると、今度は水雷砲を三回撃つ。電線を水中に入れ、薬丸でその火気を衝いたという。(水雷が)発砲される時、その音は霹靂の如く、波は山のように立ち上がる。初めて見る景観である＜『日槎集略』巻地五月二十日＞

日本では一八七三(明治六)年一月十日、国民皆兵制を取りいれた徴兵令が制定されており、朝鮮修信使たちが日本を訪問したのはその後のことである。結局、

彼らは日本の新式軍隊訓練を初めてみたのであるから、その訓練動作一つ一つに見入ったのは当然のことである。中でも口は海軍の競漕見物記であるが、日本では一八七七～八（明治十～十一）年頃から東京大学の学生でボートを漕ぐものが出始め、一八八二（明治十五）年東京師範学校も二隻のボートを造って漕いでいたが、一八八三年には両校の間でレースが行われたという。[16] これをきっかけに東京大学に漕艇倶楽部が創設されるが、同年六月三日には海軍省も、明治天皇を迎え、隅田川で午前九時から午後三時までボートレースと水雷の打ち上げを行っている。[17] しかし李鑢永一行が海軍競漕を見物したのは一八八一（明治十四）年五月二十日（新暦六月十六日）のことである。恐らく海軍競漕は早くから行われたようである。日本側は生まれたばかりの海軍競漕を彼らに是非見せたかったのであろう。

しかし軍事施設や訓練をみた朝鮮使節の心は意外にも冷たい。かえって辛辣な批判を浴びせている場合もあるのである。ここにその適例があるのでしばらく引いてみることにする。

③ 軍律と兵制に対する所見

イ　陸軍士官学校の教場と砲兵工廠をみにいった。馳馬、放砲、跳躍、材蹶（倒れたり覆えたりすること）しながら高いところを這いのぼり、険しいところを攻めながら先を競って勇ましさをみせるので、技芸はますます精熟する。また算数、測候、図画、工匠の術を学び、それを修めてから初めて上将になれる。

日本の師律（軍律）と兵制が精強でないのではないが、西国人の目でみればまだこどもの戯れに過ぎないであろう。況んや幅員（地域）の広さと狭さが揃っていないばかりか、士馬の健気さと弱さが等しくないし、軍に地水（『易経』の地水師卦）の丈人（立派な統率者）がいないうえ、兵はみな市井の游民である。それなのに他人の術を学び人の要衝を倒そうとするのは難しいことではなかろうか。人々が逢蒙（『孟子』離婁下にみえる人物。夏の時代、弓術にうまい有窮国の王であった羿から弓道を習ったが天下一になりたい欲望で恩師羿を殺した残酷な人物）になってくれればよいが、そうでない限り、あちらの技は無窮であり、こちらの才はただ黔驢の手並み（見かけは立派である

が中身がない有り様。むかし中国の黔州で通りすぎる驢馬の鳴き声を聞いた虎はその大きな響きに驚き怖く感じたが、その足げが弱いことを見極めたので結局驢馬を殺して食べたという故事。出典は柳宗元『三戒』に過ぎない。兵志のいわゆる泰山と累卵のように勝敗の形成は敵を待たずに決っているのである。故に自ら強くなろうとすれば徳を修める道しかない＜『東槎漫録』一八八五年一月十九日＞

□　孟津の軍士は紂の相手になれなかったし（『書経』武成の故事。周の武王が商の紂を討つ時のことである。出征一ヶ月足らずで孟津を渡ったが、武王の軍勢は少なかったため、紂の相手としては弱い立場であった。しかし慈しみ深い武王の徳に感心して民衆が悦んでついてきたので最後には戦いに勝つ）、縞素を着けた軍士は項羽の相手になれなかったが（『史記』古祖紀の故事。漢の劉邦が巴蜀で出師し、項羽を討つ時のことである。劉邦は、楚の義帝を殺した項羽の罪を問うという名分を掲げ、軍士に縞素すなわち白い喪服を着用させた）、結局は勝利を収めた。季梁が随にいたので楚の軍士が攻撃できなかったし、司馬光が宋の宰相になったので敵人が互いに警戒したのは、徳があるからであり勢力のためではなかった。豺狼は嫌でないのに、犬や豕がや

たらに飛びかかるような事態になると、たとえあちらの制度を学んだとしてもその切っ先を防ぐのは難しいであろう。学んでも学ばなくても破れるのは同じである。もし徳を修めれば軍事的には破れても修めたところの徳はかえって失墜しない。……（中略）……なおかつ臨機応変の奇計で勝利を手にするのは、自得による権謀があるからであり、学んでからできることではない＜『東槎漫録』一八八五年一月十九日＞

一目にも堂々たる兵略である。中国の歴史から適切な故事を引きながら日本の軍事政策の誤謬や間違いを真っ正面から攻撃している。結論は当然ながら歴史と儒教の教えにしたがって仁徳に帰るべきだというのである。いかにも朝鮮の文官らしい見方である。いずれにしても日本側が意図的に見せつけた立派な軍事的施設や訓練様子はねらい通りの効果はおろか、かえって逆効果として跳ね返ったともいえよう。

(3) 文化と各種制度、その他

修信使一行が見物した文化施設や各種社会制度のなかには博物館、博覧会、新式学校、新聞、救育院、監獄署、病院、盲唖院、競馬、議事堂、銀行、洋式宴会、

舞踏会、洋式服飾などが含まれている。いずれも修信使たちの目には珍しくみえたようであるが、たまには批判的意見が書き加えられた場合もある。

① 博物院、博覧会

イ　延遼館での宴会が終り、帰る途中、博物院に立ち寄った。ここは一体何百、何千間なのか知るよしもないが、彼らの后妃の着物、朝廷の儀仗すべてが並べられており、余に見せるためである。殷彝（殷時代の儀式用器）、周敦（周時代の黍と稗を盛る器）……（中略）……一ヶ所に到ると色の褪せたぼろぼろの旗纛、表を藁縄で巻いた瓶、馬の鬣（たてがみ）で造った巾（一種の冠）、獣の皮で作った履物、紅い錦で拵えた女性用の裳（チマ、スカート）、青色の錦で拵えた上衣（チョゴリ）などが乱雑に展示されている。いずれも我が国の物である。これを見るのは気の毒であった＜『日東記游』巻二玩賞＞

ロ　（大阪で）博物会に往った。各国の珍宝と不思議な品物が集められており、ない物がないようだが、すべてが瑠璃で囲まれ保護されている。檻の中で暮している禽獣としては孔雀、錦鶏、鴛鴦、熊などがもっと奇観であった。一

ヶ所には朝鮮の物件があったが、黒笠、草鞋、甕器瓶と缸（かめ）、毛揮（防寒用帽子）などであった〈『日槎集略』巻地四月十八日〉

ハ　（西京で）飯後、博覧会に往き順次廻って見た。各品の珍異さと数は大阪より勝れた。一ヶ所に大きさが茶碗のような水晶玉があって、鏡のように閃く。値段は三千五百円だという。我が国のお金にして一万両あまりである。続いて一ヶ所に到ると朝鮮の物品があったが、明紬、春布、北布（いずれも織物）、尾扇、白笠、白鞋、氅衣（官吏の普段着）、小氅衣、木青裳、行纏（脚絆）、吐手（防寒用腕首覆い、腕袋）、青玉草盒などである。しかし、質の低い劣等品だけを集めて陳列しており、その意図が怪しい。一隅に一人の女人像が掲げられている。聞くとこの女人は三韓から日本にはいり織工を教えたのでその功を忘れないため残した像がいまもなお伝来するという〈『日槎集略』巻地四月二十一日〉

ニ　（東京で）諸公と一緒に教育博物館にいくと館長箕作秋坪が迎えてくれた。雛形（小型の模型）として作った品物を集め、小児に見習いさせるので教育博物館というのである。……（中略）……その後、博覧会に往き適度に見廻ったが、中では日月地球機といって、天の運行を擬したものが一番見事であった。

しかし、これと璇璣玉衡（渾天儀、天文観測器具）とは一概に比較できないので、余の狭い見解ではでたらめのようであった＜『日槎集略』巻地五月十四日＞

ホ　（東京で）正使に従い博物館に往ってみた。……（中略）……館内の上下二階を周游遍覧した。人形、仏像、書籍、刀剣、書画、琴簧、衣服、器物、農桑耕織や金銀銅錫や医薬卜筮に関わる品物、水から釣り、山から捕った不思議な禽獣や美花、異草などがある。……（中略）……門を潜り動物館にはいった。……（中略）……余が迎接人に、この動物館を建て、禽獣を集めて何年になるかと聞いたところ、十年になるという。余は考えた。開国以来数三千年にいたる間、日本にも必ず賢い国君と立派な補佐があり、その名が世に知られているだろう。しかし、夙にこのようなこと（博物館と動物館のこと）がなかったにも拘わらず、開化以来営造に汲汲し、遠近の工作物種を集めたが、その費用はさぞ多かったに違いない。物事の面で博識な人にこれを見せれば、なるほど取るべき物もあるだろう。なれど結局、今の天下において（それが）国の急務ではない。君心ますます豪蕩しがち、民生いよいよ困窮に陥るのは当然すぎるほど当然である。それにも拘わらず、かえって自ら大きいふりをしながら、隣国を軽視するのは一つの笑い種にも満たない態度である＜『東槎

漫録』一八八五年一月十二日〉

日本は早くも一八六七（慶応三）年、パリ万国博覧会に参加しており、一八七一（明治四）年のサンフランシスコ市工業博覧会には東京府が出品したこともある。しかし内国博覧会としては同年十月十日から十一月十一日まで開かれた京都博覧会と十一月から開かれた名古屋博覧会が最初である。さらにその翌年三月十日から五月三十日までには第一回京都博覧会が開かれており、それは毎年定期的に催されるようになる。一方、東京では一八七七（明治十）年八月二十一日から十一月三十日まで上野公園で第一回内国勧業博覧会が開かれている。その折、上野公園と博物館や動物園の建設計画が浮かびあがったという。[18] そして一八八〇（明治十三）年一月に来日し、工部大学校造家科教師兼工部省営繕局顧問に就任した英国人建築家ジョサイア・コンダー（Josiah Conder 日本では普通コンドルと呼ばれている）の設計と監督に関わる上野博物館が開館したのは一八八二（明治十五）年三月二十日である。ところで金綺秀は一八七六（明治九）年に東京で博物院をみている。要するに彼がみたのは上野博物館ではありえない。日本の博物館の嚆矢は一八七〇（明治三）年大学南校に設置された物産局仮役所で、ここに派遣された田

中芳男は各地の物産を収集し、翌年には九段坂上に物産園を開いたというから[19]、金綺秀が見物したのは恐らくそれに似た物産展示会ではなかったかと思われる。しかしホにあらわれる博物館と動物館は上野にあったものに違いない。朴戴陽はその博物館と動物館に対し、国の急務でもないところにお金を使ったとして鋭く批判している。

② 学校、学習

イ　いわゆる学校は、その名称も一つだけではなく開成学校、女子学校、英語学校、諸国語学校がある。師範（先生としての模範）も鄭重であり、教授（教えること）も勤摯であるが功利の学に過ぎない。勤勉に努力を続け、昼夜にも休まないので、その逞しさはいうに及ばず、その勤勉さはもっというを待たない。算計の精密さと規度の繊細さは、秦の商鞅（宰相公孫鞅）が風聞を聴くだけで逃げる程であり、宋の王荊公（宰相王安石）も襟を正して敬意を表する程である＜『日東記游』巻三俗尚＞

ロ　（長崎の師範学校で）学校を廻って見ると、一ヶ所に八大家（唐宋八大家）

を読む学徒があり、その他は画学、医学、数学、化学、理学があって、それぞれ先生と生徒はあるが、我々のいう学校ではなかった＜『日槎集略』巻地四月十二日＞

ハ　（大倉組の社長喜八郎の招待に応じて隅田川の別業（別荘）にいった時）書画に優れた女性が四人いて、一人は十二歳、一人は十一歳、一人は八歳、そしていま一人は三十歳だという。三十歳の人は先生であり、残る三人はみな士族の娘で女学校に通っており、十二歳の女の子は右大臣三条実美の娘だという。士族の娘が書画を習うのは、我が風俗にはないことだが、このような宴会の席にいながらも、ごく平気でいられるからもっと怪しい＜『日槎集略』巻地五月九日＞

ニ　今度は工部所属の太学校（大学校であろう）へ往った。数百の学徒が化学、理学を学んでおり、長崎県の師範学校と異らないが、ただその規模が大きいだけである＜『日槎集略』巻地五月十三日＞

ホ　更に師範学校を見に行った。蓋し、男学校と女学校があって、男女四～五歳以上を選び、その上に長を立てて教える。各々処所があって、椅子に列坐するが間架はない。中でも一番幼いものはまず手戯を習う。針と糸をもって

各種の色紙に穴をあけ、あるいは円くあるいは長くするのだがそれぞれ間隙があって竹纓（朝鮮笠につける竹製の紐）のようにみえる。やや大きくなったこどもたちは木片で家作りを学ぶ。七～八歳以上になると小学校にはいり文字、算数、図画法を学び、十歳以上は中学校にはいり小学で学んだ内容を深めながら、事物に対する知識を求める。女子もまた年齢にしたがって次第に内容を高めながら書籍、筆画、刀箚（彫ったり刳ったりすること）を教わる。食後には皆に運動をさせる＜『東槎漫録』一八八五年一月十九日＞

〈　大学校の鉱学、化学、医学などへ行ってみた。……（中略）……化学はもっぱら水火二気が互いに不思議な作用を起こし、その変化には限りがない。……（中略）……医学校に到ると、室内には髑髏（骸骨）が満ちており、その臭いは吐気を催す。また棚の上に置いてある瑠璃のかめには、人の腸腑を薬水に浸し、腐らないようにしてある。他の所に到ると、ちょっと前に死んだばかりの人体から刀で皮を剥き、肉を切り取りながら四肢を分解している。耳で聴くにも忍びがたいことであるが、況や目で見るからにはとても耐えられない。一行全員が目を逸らし、鼻を覆いながら方向を変える。おおよそ西洋の風俗として、難治の病に罹った人は死境に臨み、自分の屍体を医院に託して、

皮を剥き骨を割って病気の原因を割り出し、他人の治療にその効果が廻るよう子弟に頼むという。人の子として父母を二度も死なせることはできないといって、その意思を無視すると、（人々は）かえってその子弟を不孝者として扱い、相手にしてくれないともいう。いまの人々がそのような法を慕い、死んだ骨まで売るようになったのは不仁の至りと言わざるをえない。いかにしたら人理をもって（それを）誅殺することができるだろうか＜『東槎漫録』一八八五年一月二十一日＞

日本では一八七〇（明治三）年に大学規則、中小学規則が定められ近代新式教育が始まる。翌年には従来の大学のかわりに文部省が設置され、さらにその翌年九月には学制が頒布される。当然ながら朝鮮修信使たちが日本でみた学制とその学習内容はまったく新しいものだったのである。特に彼らが驚いたのは女子教育と化学、医学教育などであったようである。そして屍体解剖に対しては辛辣な批判を加えている。

③ 新聞紙

イ　いわゆる新聞紙（いまの新聞）は、毎日のように字を築き印刷されるのだが、これがない所はない。そうして公私の聞見、巷の語り種は、口の中の唾が乾かない内に速くも四方に伝わる。これを作る人は事業と看做し、そこに引っ掛かる人は栄誉か侮辱を味わう。また、その字は必ず荏胡麻のように小さく、その精巧さは比べる所がない。大体、彼らは活動を好み黙っているのを嫌うので、仕事がないと不安を感じ、それがあれば喜んで跳ね上がる。そういう訳で細やかなことを見ても眉を上げ、身を振るい、痒い所を知らない癖に十本の指で掻く。これが彼らの生まれつきの性格である〈『日東記游』巻三俗尚〉

ロ　ここに来て以来、新聞紙から我が国に関わる記事を見ると事実と異なる場合が多い。あるいは謝罪使、あるいは事大党といって（我が）朝廷を謗る時が多い。真に醜くて堪らない〈『東槎漫録』一八八五年一月十日〉

日本で日刊新聞が初めて現われたのは一八七〇（明治三）年の横浜毎日新聞である。その後一八七二年には東京日日新聞（現在の毎日新聞）、一八七四年には読売新聞、一八七五年には東京曙新聞、一八七六年には大阪日報、さらに一八七九年

には朝日新聞などが出ており、他にも隔日や週刊など多数の新聞が発行されている。金綺秀はそれを興味深く見ているが、朴戴陽は早くもその被害を訴えている。その内容については後で具体的に触れる。

④ 救育院

救育院を設け孤児や貧しくて家を持たない子供を集めて養い、彼らが一人一人の成人になり産業があれば帰すことによって家庭の安定を図るという

＜『日東記游』巻三政法＞

ここに出てくる救育院は文脈から判断するかぎり孤児院の意味であろうが、金綺秀が日本を訪問した当時孤児院という名称の施設はなかったが、もしあったとすればそれはロシア皇太子の訪日に際して市内にたむろする乞食を収容する目的で一八七二（明治五）年東京に設立された養育院か[20]、一八七五（明治八）年三井組が許可を申請した育児院[21]のような施設であったかも知れない。当初の計画によるとこの育児院は翌年の一月に施行する予定だったので、それが予定通り実行されたとしたら五月に東京へはいった金綺秀がそれを見物した可能性はありうる。

しかしこの記録はただの伝聞であった可能性もある。

⑤ 監獄署

（大阪で）飯後、諸公とともに監獄署へ往った。罪人の士族と婦女はそれぞれ別の所にあって、士族は本を読み、婦女は針仕事や機織りをしながら家庭同様に過ごしている。どんな罪であれ、処決は裁判所を通るので監獄署の仕事ではないし、未決囚と既決囚は一千五百余名あるという。既決の者は赤い衣服を着けて公役（懲役）にはいるが、罪の軽重により一日または一年から終身まであり、重罪は殺人者であるという〈『日槎集略』巻地四月十八日〉

日本で裁判所という名称が一般化したのは一八七一（明治四）年七月司法省設置にともない、同年十二月二十六日（新暦明治五年二月四日）東京裁判所が設けられてからのことである。その後一八七二（明治五）年八月には各裁判所、検事局、明法寮章程など司法省職制章程が定められる一方、十一月には監獄則も定められる。これで司法制度や行刑制度が一応整えられるわけであるが、要するに上の記録に出てくる監獄署はむかしのような厳しいところではなく、新しい感じをほのめか

すところである。それを記録に残したのはそのためであろう。

⑥ 療病院

（大阪で）療病院に往った。十人の医長（医師）が学徒三〜四百人を教えるが、病者もまた何百人あって、ある者は布団を被って横になっており、ある者は寝床に凭れて坐っている。また、木を彫って作った半身人形があって、腸腑と筋絡がみな備えられ、恰かもむかしの銅人（漢医学で経穴を知るために作った銅製の人形）に似ている。また見ると骨を掻き、肉を切り、喉を通り、膀胱を触る鉄製の器具がある。更に聴くと屍を解剖し、その腸腑を直接診て病因を割り出すというのだから、驚きと怪しさはいうに及ばない〈『日槎集略』巻地四月十八日〉

幕末から明治初期にかけては病院という語がなく、普通は「医院、施薬医院、済院、普済院、養病院、大病院、避病院、療病院」などとも呼ばれたので[022]、上の引用文にみえる療病院とは他ならぬ現代語の病院を意味する。日本にこういう新しい病院が最初に現われたのは一八七七（明治十）年である。海軍省が伝染病患

者を収容するため品川にたてた避病院がそれである。[23] 朝鮮使節は大阪でそういう新しい病院内部を見物しているが、ここでも屍の解剖には否定的な態度を捨てていない。

⑦ 盲唖院

（西京で）盲唖院に往って見ると、各自の教坊（教室）が設けられており、陽刻の板を使って、書字と地図を手触りで分かるようになっている。また、読書、手算、方向探し、直行能力、速やかな手真似は盲者のための学習である反面、女は刺繍と糸扱い、男は習字と造器、これが唖者のための学習である。学徒は数百人あるという。盲唖者に至るまで捨て物にせず、工業に専念させるのは、一見、一般人の生活にまめまめしく導くように見えるが、これもまた利益を追求するためではないのだろうか＜『日槎集略』巻地四月二十二日＞

中村正直、古川正雄、岸田吟香、宣教師ボルシャルトらが東京で盲人の保護教導のため楽善会を組織したのは一八七五（明治八）年五月のことであるが、ジョサ

イア・コンダーの設計による訓盲院は一八七九（明治十二）年十二月竣工され、実際の授業は翌年の二月から始まっている。この訓盲院は一八八四年にいたり訓盲唖院になるのだが、これも盲唖院という名称ではない。ところが紳士遊覧団一行が京都に立ちよった一八八一年にはもはや京都に盲唖院があったようである。上に引いた記録がその裏付けになる。とにかく彼らは盲唖院のような新文明の社会福祉施設を初めて見たのであるが、ここでも少しは疑いの目を向けている。盲唖者教育を利益追求ではないかと疑っているのがそれである。

⑧ 競馬

巳時（午前十時前後）、汽車に乗って横浜の競馬場に着いた。日本朝廷の君臣と各国の公使がみな家族揃いで集まったので、天皇が呼び寄せて労った。観光に来た男女が塀をなす程多く集まっている。周り一帯を柵で囲み、それが五里もある。馬に巧く乗るものを選び、柵内を走らせるのだが、馬は全部大宛国産種である。雲に向って嘶き、空中に跳ね上がる気勢があればこそ、走るのが流れ星のように速い。限標（ゴール）まで先に着く者には賞を懸けて励ますので、よほど面白い＜『使和記略』九月二十日＞

日本でスポーツとしての近代競馬が初めて行われたのは文久年間（一八六一～一八六三）のことで、開催主体は横浜居留地の外国人たち、開催場所は幕府から借りた横浜根岸村の一角であった。[24] この競馬は年を追うごとに盛んとなり、やがて日本人にも有料で見せ、馬券を売るようになったという。一方、日本人による初の競馬は一八七〇（明治三）年九月兵部省が九段の招魂社（のちの靖国神社）で催したものだった。この招魂社競馬は、兵部省廃止後も陸軍省が引き継ぎ、年三回の例祭にはかならず開催された。明治政府は軍馬の改良と増産に力を入れたこともあり、競馬用の馬軍づくりも熱を帯びたため、明治天皇や外国の要人も競馬をよく観戦した。上の引用文からもそれがはっきりうかがわれる。

因みに、横浜競馬場をすでに見物した朴泳孝はその後の十月九日（新暦十一月十九日）、さらに東京の戸山競馬場に行ったが、そこにも各国公使がみえたという。この戸山競馬場は、東京芝の三田育種場内から戸山学校内に移されたもので、後日上野の不忍池畔に大規模な競馬場が作られるまで存続した。

⑨ 議事堂

元老院は門墻頗る高く揃っている。一度そこに行ってみると、いわゆる御

門というのが他の官衙とは比較にならない。二品（朝鮮の位）官職の親王が我らを迎え、一緒に議事堂へはいった。議事堂は高くて平直であり、長い卓子を備え、その両側に椅子百十余を設置した。ここは大会議がある時、彼らの皇帝が親臨し、議官たちが列席する所だという〈『日東記游』巻二玩賞〉

元老院とは一八七五（明治八）年四月十四日に出された立憲体制樹立の詔によって創設された立法諮問機関で、同年四月二十五日には元老院章程と職制、官等が定められた。[25] そして最初の議官には後藤象二郎、陸奥宗光、河野敏鎌ら十四名が任命され、四月二十八日には議官の投票によって選ばれた後藤が副議長に就任する。それから七月五日には元老院の開院式が行われるが、勅選の議長として有栖川宮熾仁親王が就任するのは翌年の五月十八日のことである。

ところで金綺秀が元老院を訪問したのは同じ年の六月十五日（旧暦五月二十四日）である。したがってここに出てくる親王は議長に就任してまだ一ヶ月も経っていない熾仁親王であり、金綺秀は熾仁親王の案内で議事堂を見物したのである。しかし金綺秀は議事堂の内部構造を簡単に説明しているだけで、その本務や役割に対してはあまり興味を示していない。実はそこに一つの言い争いがあって、金

はやむをえず議事堂を訪問したのである。その経緯についてはのちほど改めて触れることにする。

⑩ 銀行

銀行を設けてからは公卿宰相のような豪貴な人や富商大賈と雖も、家に家財を蓄えるのではなく、銀行に任せ、所用に従い計算に合わせて引き出して使う。したがって、家に持っているのは什物や服飾や器用に過ぎず、後はなにもない。故に火災があっても家屋を焼かれるだけで、家産には及ばない

〈『東槎漫録』巻末東槎記俗〉

日本では一八七二（明治五）年十一月国立銀行条例の布告にともない、翌年の六月十一日には第一国立銀行が東京に設立され、七月二十日からは営業を開始している。その後、全国各地にも次第に国立銀行が設立され、一八八〇（明治十三）年にはその数が百五十三におよんでいる。他方、一八七六年七月一日には私立三井銀行も開業するようになる。しかし朝鮮修信使たちが近代経済の象徴である銀行に案内されたことはほとんどなかったのであろう。その役割は説明を聞くだけで

理解できるからである。引用文にみえる簡単な説明がそれを物語っている。その代わり彼らは、前述した通り、造幣局に案内され貨幣の製造過程をみている。しかし彼らは銀行と造幣局との関係や銀行の大切さにはあまり気がつかなかったようである。

⑪ 宴会、夜会、舞踏会

修信使たちは公式宴会や夜会や舞踏会でも新しい文化を経験する。彼らにとってはその一つ一つが初めての経験であるから関連記録もことのほか具体的である。

イ　延遼館での下船宴ー洋式食事（一八七六年五月十二日、新暦明治九年六月三日）

太政大臣三条実美以下十三人の官人が既に来ている。大きい卓子を囲んで坐った。……（中略）……一人一人の前には磁器皿二つが置いてあり、一つには白布と餅が置いてある。白布は食べる時、水の滴が落ち（着物を汚さないように）支えるものであり、餅は飲食を助けるものである。皿一つにはなにも置いていない。その横には大中小三つの匙（実はフォーク）が置いてあり、

歯があって食べ物を摘んだり刺したりしながら食べることができる。右側には刀（実はナイフ）が二つあり、その後ろにも匙が二つあるがどちらも一つは大きく、一つは小さい。いよいよ食べ物を運んで来たが、固いものと柔らかいもの、汁と切肉は量が少ない。固いものは歯の付いた匙で押さえながら刀で切り取り、柔らかいものと汁は匙で掬い上げながら食べる。あるいは匙で掬ったり、あるいは刀で切ったりしながら食べるが、一応食べたら、それを皿の上に置く。この時、侍者がその皿を持ち出し、綺麗に洗って再び返す。刀も匙も以前の場所に置かれる。改めて食べ物が運ばれ、この前のように食べる。皿をまた返し、刀と匙を以前の所に置くのも前と変わらない……（中略）……酒を少しずつ飲んで、杯にまだ酒が残っていても、その上に酒を注ぎ、食事が終るまで飲んだ。杯を勧める時には、その都度音楽を奏するが、非常に速く流れている内にだんだん低くなる。その制作は巧みであったが西洋の音楽だという〈『日東記游』巻二燕飲〉

餅のような食べ物は日にちが経ち既に忘れてしまったが、食べながら筆を持って描いても形容しにくい。その作り方がおかしく、大体は初めて見るので、見てもその名を知らず、食べてもその味を知らなかった。いわゆる氷汁

というのは氷を磨り減らして粉を造り、卵黄と砂糖を混ぜるものだというが、汁のみで氷ではなかった。一口だけでも口の中にはいったら、歯の端まで冷たくなるので、どういうふうに造られたのかわからない。また、氷製というのは五色に光っており、形は仮の山に似ているし、味は甘くて食べられそうだが、一度口の中に入れると肺臓まで冷やっこくなるので、これもまた不思議なものであった〈『日東記游』巻二燕飲〉

延遼館は現在の東京中央区旧浜離宮正門内の芝生の一角にあった建物で、むかしはこの一帯が将軍家の鷹場であったという。一六五二（承応元年）年三代将軍徳川家光の次男甲府宰相松平綱重に譲られ、下屋敷になったところ、綱重の死後彼の息子綱豊が六代将軍家宣になったので、ここも浜御殿と呼ばれるようになる。その後からは将軍家の別邸として大修築が行われ江戸を代表する名園になったところである。幕末の一八六六（慶応二）年、海軍奉行の所轄となってから、ここには洋風木骨石張建物（石室）が建てられる。この石室は一八七〇（明治三）年、延遼館と命名され、外国からつぎつぎと訪れてくる賓客の宿泊所すなわち迎賓館に当てられた。実際、一八七九（明治十二）年来日したドイツ皇帝の孫アルベルト・

ヴィルヘルム・ハインリヒ親王、アメリカの前大統領グラント将軍などがここに泊っている。それより三年前には金綺秀もここで二十日間泊まったのである。

ところで上の引用文は金綺秀の入京を祝うため延遼館で開かれた宴会の食事場面であるが、ここには西洋式食事の過程がとても細かく描かれてある。ここにみえる食べ物や飲み物の名前もさることながらその解説が面白い。たとえばナプキンを「白布」、パンを「餅」、フォークを「歯のついた匙」、ナイフを「刀」と表現している。固いものを歯のついた匙で押さえながら刀で切り取って食べたというから恐らくそれはビーフ・ステーキだったのであろう。それを「切肉」と呼んでいるのも面白い。最後に出てくる氷汁はかき氷（氷水）、氷製はアイスクリームである。

日本に西洋料理が紹介されたのはオランダやポルトガルからでわりと早いが、一八六六（慶応二）年頃には西洋料理店があちこちにできていたことが記録に残っており、その翌年には福沢諭吉が西洋料理の食べ方などを紹介しているという。[26]一方、一八六九（明治二）年六月には横浜馬車道に町田房造が氷水店を開業し、氷水やアイスクリームを販売したという。[27] 金綺秀は西洋料理やパンと氷水やアイスクリームを初めて食べたので、その形や食べ方をじっと見つめているが、当時

の日本ではそれらがすでに見慣れている西洋文明の一部であるに過ぎなかったといえよう。

ロ　天長節夜会（一八八三年九月二十三日、新暦明治十六年十一月三日）

午後六時、外務卿官邸に往った。火戯（花火遊び）が大きく開かれたが、その珍しさや不思議さは形容しがたい。各国公使と日本朝廷の縉紳が家族連れで集まり、主人井上馨は夫人と令愛（令嬢）とともに門の前で客を迎えた。身なりはみな洋装であった。暫く経って楽隊が太鼓を敲き、笛を吹きながら演奏を始めると各国の旗章が正堂に掲げられた。多数の公使が夫人と娘の手を互いに変えながらぐるぐるまわり、足を踏み鳴らしながら踊る。その姿が天真爛漫であったのは日皇の天長節を祝うためである。踊りが終ると音楽も止まった。立ったまま食べ物を食べる集いを催し、賓客五～六百人が卓子の周りに集まって、酒を酔う程飲み、食べ物を腹いっぱい食べたが、これは西洋の宴会法をまねたことである＜『使和記略』九月二十三日＞

これは天長節の夜井上馨外務卿官邸で行われた西洋式パーティの風景である。

洋装の姿で集まった外交官と日本朝廷の高官は夫婦同伴であり、主人井上夫妻は令嬢と一緒に入口で客を迎える。やがて楽隊の演奏が流れるとダンスが始まる。踊りが終るとカクテル・パーティにはいる。修信使朴泳孝は初めて目にするこの西洋式宴会過程を興味深く眺めたようである。

ところで日本人による最初の舞踏会は一八八〇（明治十三）年十一月三日の天長節に上記の延遼館で開かれた夜会でのことであったという。[28] 外務卿井上が主催し、工部大学校で開かれた前年の天長節夜会でも舞踏会はあったが、外国人だけがダンスをしていたに過ぎない。その後一八八三（明治十六）年一月十六日には京橋区木挽町の明治食堂でも舞踏会が催された記録がある。[29]

幕末に締結された西洋諸国との不平等条約を改正するため外務卿井上馨は必死の努力を傾けた。西洋人と同じような舞踏会を催すのもその一策として採りいれられた。そのため彼はつぎの項目に出てくる鹿鳴館の建設に力をいれていたが、その開館パーティを目の前にして催されたのが上記の天長節夜会である。結局、この夜会にダンスが組み込まれたのは井上ならではの思惑で、間もなく開催される予定の鹿鳴館落成式および開館パーティの予行練習のつもりであった感じがなくもない。

八　鹿鳴館舞踏会（一八八五年一月二十三日、新暦明治十八年三月九日）

夜、大山巌（当時の陸軍卿兼参議）招待の鹿鳴館夜会に参席した。楼上、楼下の煤灯（ガス灯）と蝋燭は集められた花房のように見え、綺麗な花や芳しい草は錦の屏風を開いて置いたように見える。楼の三階（実は二階、鹿鳴館は二階の建物であった）に上ると黒くて肌寒い男が、白くて目まぐるしい女の装いで、おもちゃと香り袋をしなやかでなまめかしく揺すぶりながら、笛の音に節を合わせると、諸々の文武百官は自分の婦女を従え、各国人男女と交わって、二人ずつ互いに抱き合い、夜遅くまで踊り続けた。その光景は錦のような花びらの中で鳥と獣が群がって戯れにもてあそぶように見えた。

日本の女子はみな西洋の着物を着けている。これは維新以後の風俗だという。女子の開化が男子の開化に勝るとも劣らないのを見ると、開化以前には女子にいい風俗がなかったことと推測される。殊に、一つの笑い話しになるのは、二十歳余りに見える一人の美しい女が、大勢の人波の中で余の手を握って何かを話し掛けたのである。舌人（通訳）に聞くと、それが他ならぬ陸軍卿の夫人で、宴会にお越し頂いたことに対し感謝の意を表したという。

床頭（机先）の一介の書生に過ぎない余は、夙に娼婦や酒母の手を握ったことも一度だにないので、いきなりの出来事に戸惑うしか仕様がなかった。舌人は「これが我が国で貴賓を接待する第一の作法です。怪しく思わないで下さい」という。そこで余は急に欣然な顔を見せながら、宴会へのお招きに預かったこと、お蔭さまで立派な宴会に参らせて頂いたことについて感謝した。これは俗に「気違いの傍に立つと正常な人も気が狂う」という表現にぴったりと当てはまる。男女に倫理がなく、尊卑に法がなくなったこと、ここに至るとは、嫌らしくて堪らない〈『東槎漫録』一八八五年一月二十三日〉

井上馨が寺島宗則の後を継いで外務卿になったのは一八七九（明治十二）年九月十日のことである。彼は外務卿に就任するやいなや欧米諸国との間に締結していた一八五八（安政五）年の不平等条約を改正しなければならないと考えた。そのためにはまず日本人が欧米諸国と同じ水準の生活をしており、すでに近代国家として十分な条件を整えていることを内外に示しながら不平等条約の改正に踏み切ろうと考えた。そこで生まれたのが欧化主義の実行である。日本人の生活を西洋化し、外国人との交際を深めるのがその具体策として浮かびあがったのである。

折しも諸外国から国賓級の人物が訪れることも多くなったが、適当な宿泊施設がなかったので、浜御殿内にあった延遼館を修理して、上述したようにハインリヒ親王やグラント将軍をそこで迎えていた。しかし井上馨はそのような仮設の宿泊施設に外国の賓客を泊めながら不平等条約の改正のような難問に立ちむかっては勝算がないので、早急に本格的な施設を作らなければならないと考えた。

そして一八八〇（明治十三）年外国人接待所の建設計画がたてられ、井上はその設計を工部大学校教師ジョサイア・コンダーに頼んだ。最初は国賓の宿泊にふさわしい施設をたてるつもりであったが、当時の日本にはまだ在留外国人との交際に適当な場所がなかったので、社交場ともなる建物を目指して計画を修正することにした。こうして東京麹町区旧山下門内の元薩摩藩装束屋敷跡（現在の千代田区内幸町一丁目の大和生命敷地、帝国ホテル隣地）に竣工されたのがおよそ四百四十坪余りもある洋風煉瓦造二階建の鹿鳴館である。[30] 鹿鳴館の「鹿鳴」とは井上の夫人武子の前夫にあたる桜州山人中井弘が『詩経』の「鹿鳴章」からとった名称で、迎賓接待の意味を象徴しているという。

鹿鳴館の落成式は一八八三（明治十六）年十一月二十八日に行われた。当初は明治天皇の行幸が予定されたようであるが、急に取りやめられ、その名代として有

栖川宮熾仁親王と薫子妃が出席した。その他に伏見宮と同妃をはじめとして参議、知事、県令、各国公使などおよそ千二百名が招かれた。そして当日の舞踏会は夜半におよび、翌日の午前二時頃になってようやく静けさを取り戻したと言われる。(31)

鹿鳴館が外国からの賓客の宿泊や接待のために建設されたのはたしかである。しかしそこにはもう一つのねらいがあった。日本は決して未開野蛮の国ではなく、欧米諸国にも劣らないほどの文明開化国であることを外国人に印象づけようとしたねらいがそれである。そういうわけで鹿鳴館では外務卿井上馨夫妻はいうまでもなく、陸軍卿兼参議大山巌夫妻、文部卿森有礼夫妻の尽力で夜ごとのように舞踏会が催された。上記の引用文に見える夜会もその一つであったのである。

当夜の主催役は大山巌だったので、大山夫人は当然ホステスとして朴戴陽に近づき手を握ってお礼の言葉をかけたのである。実はその夫人こそ山川捨松であって、彼女は一八七一（明治四）年十一月、岩倉具視一行の米欧視察団に随行してアメリカに赴いた五名の女子留学生の一人である。彼女は帰国後、相手は再婚であったにも拘わらず、望まれて大山巌の夫人となり、鹿鳴館に深くかかわることになった女性である。捨松は日本最初の女子留学生の一人でもあったし、当夜のような夜会や舞踏会にはなれていたに違いない。しかし彼女の西洋式儀礼作法が儒教思

想の持ち主であり、典型的な朝鮮の文官であった朴戴陽には理解できるはずがなかった。結局、朴は「男女の倫理や尊卑の不在」に対する嫌らしさを率直に吐き出している。彼女と朴との間には互いにまだそれほどの時代的隔たりがあったのである。

因みに、当時の日本でも鹿鳴館を鋭く批判する世論が時々あらわれた。華族や政府高官といった特権階級が舞踏会だ夜会だとうつつを抜かしている裏では、日々の食べものにも事欠く多くの人がいて、苦しい生活を強いられているとか、鹿鳴館に象徴される日本の西洋化は単なる猿の物まねにすぎないという厳しい目が向けられていたのである。[32] これをみると朴戴陽の怒りや嘆きが決して時代遅れの頑固さであるとは限らないといってもよさそうである。

当時の日本と朝鮮の間には依然として古くからの感情的溝が横たわっていた。朝鮮修信使たちが日本の文明開化をできる限り認めようとしなかったように、日本人の中にも朝鮮人の時代遅れを嘲るものが少なくなかった。たとえば、一八七六（明治九）年五月七日（新暦五月二十九日）、修信使金綺秀一行が東京に着いた時のことである。朝鮮使節の東京到来は一七六四年の通信使以来百十二年ぶりだったので、人々の様子はお祭りの出し（山車）を待つような雰囲気だった。しかし修

信使の行列や服装は旧時代と一向に変わりがない。そういうわけで、百年前までは賛嘆の対象であった朝鮮使節の官服が異様であり時代遅れにみえることを笑い、また行列の人数が多いことを嘲るものが多かったという。[33]

こういう時代だったのだから朴戴陽のような保守的朝鮮知識人の目に映った大山巌夫人捨松の行動は相手の立場を少しも顧みなかった行きすぎであり、儒教的倫理の衰退という側面からも批判の対象にならざるをえなかったのである。ここから一歩進んで朝鮮修信使たちは日本の文明開化そのものを精神文化の破壊という側面から大したものではないと認識したかも知れない。

⑫ 西洋式服飾

イ　（洋服、靴）衣冠はすべてが洋製だという。その公服だが、袴は体に密着し、少しのゆとりもないので立ち上がると、臀や外腎の憤起処があらわになるので、触らなくてもわかる。襦（上衣）もまた肘から肩までは袴の脚部分と同じであるが、体に近いところは広く余裕があって僧襦に似ている。多くは毛氈を使うが、たまには白色もあり、白色はその間に黒緯（縦の縞）を入れたものもある。縫裁も横と縦がちぐはぐになっており、布切れを繋ぎ合わせたよう

で、弛んでいる隙間（ポケット）にはものを入れて置く。そういう訳で煙具、吹灯、筆研、刀鐫、時針、子午盤などを容易く取り出すことができる。

靴は黒漆皮を使うが、前の方は豚の口に似ており、後ろの方には木履のような歯がある。履く時には襪（足袋）のようにするが、踝の上まで上がり、脱ぐ時には履物のようにして、そのまま地面に置く。しかし、踝がきつく挟まれるので靴を脱ぐとか履く時には力が要り、中国女の纏足のように相当苦しい業である＜『日東記游』巻一行礼＞

国王の服色は頭に冠がなく、着衣は短い襦に狭い袴で、諸臣のものと異ならないが、ただ襦の金飾だけが異なる。朝官の服色は一般人と等しいが、やはり襦の金飾が文武官の表章になっている。頭に着けた帽子の本体は大きく、遮陽は小さいが平常時のものとは少し異なり、氈（毛織物）で作られている。ひょっとすると額掩（婦女たちの防寒帽）のように見える。……（中略）……諸公と一緒に博覧会の局門の外へ出てから丘の上に登り国王の還宮儀式をみた。国王が馬車に乗ると、二頭の馬がそれを引き、また二頭の馬が左右に随う。馬車の中には参乗者があり、海陸軍楽隊（楽隊の海軍は紅い襦に青い袴、陸軍は青い襦に紅い袴を着けた）と旗を執った騎兵数十名と銃剣軍数百名が護衛した。しかし朝官の陪従は略少であった。

その威儀と節次は簡便になるよう努めたようであるが、章服の制度は礼度に大きく合わなかった〈『日槎集略』巻地五月十四日〉

ハ　（天皇の大礼服）日主の身長は六～七尺、顔が長く、浅黒い目には精彩があった。身には洋服を着けており、前後（正しくは左右であろう）の両襟には黄金色の菊の花の刺繍がある。これは陸軍の標である。両肩の上には金条（金糸）織りの紐を横から着けており、また金色の刺繍で円く作られた楪子（皿）ようなものを両脇の上につけている。これは海軍の標である。更に幅三～四寸程度の長い一条の帯を左肩から右脇に掛けて結んでいるが、これは我が国の金銀牌に似ており、兵隊の標である。身の辺には四～五の勲表（勲章）を着けているが、これは各国が互いに授与する慣例である。礼帽を脱いで手に持ち、椅子の傍の左右に立っている侍臣十余人の服色も大した差はない。ただ、海陸軍の標を兼ねたものはなく、勲功のあるものには勲表があるのみである。勲表は金あるいは宝石で作られ、五色を備えている。形は時表（時計）に似ており、あるいは角が立ち、あるいは円い〈『東槎漫録』一八八五年一月六日〉

ニ　（帽子）帽子は頂きが丸く、真っ直ぐに頭脳を圧している。周りには軒があって、ようやく日差しを遮る程である。色は黒いかまたは白く、すべてが毛氈

で作られているが、籐糸か竜鬚（藺）で精製したもの、あるいは黒緞で作ったものもある。帽子を脱ぐ時は必ず手で圧しながら折り畳み、膝の底あるいは床の上に置く。帽子を被る時は、折り畳みのところを手で立たせると、どんと大きな音が響き、折り畳みの痕は見えなくなる＜『日東記游』巻一行礼＞

ホ　（官服）彼らのいわゆる品服として、襦には金綉（刺繍のはいった錦）を用いるが、綉の多少が品（位）の高下を表わす。帽子は広げられていない荷葉（蓮の葉）に等しいが、一般には貂皮を用い、毛は相当長い。客とか目上の前では被らないのが敬意を示すことで、品服を着ている時には敬意を示すため、帽子を手で握るだけで、頭に被るのを見たことはない＜『日東記游』巻一行礼＞

いずれも西洋式服装に関する観察内容である。初めてみる異様な西洋式服飾なので、修信使たちは誰もが相当な関心を寄せている。**イ**は公式服装としての洋服と靴について観察した結果であり、**ロ**は一八八一（明治十四）年六月十日（旧暦五月十四日）第二回内国勧業博覧会[34]の褒賞式に参席した明治天皇と文武官の服飾、そこに軍楽隊の制服をごく簡単に描いたものである。**ハ**は国書の伝達式典でみた天皇の大礼服と侍臣の服装をわりあい細かく描いた内容であり、**ニ**は西洋式帽子

すなわち中折れ帽子とその作法に対する観察である。修信使たちは以上のような西洋式服装の珍しさに並みならぬ関心をみせながらも、積極的な論評はしていない。ただ口からは服装が礼度に合わないという指摘がみえるが、その対象が軍楽隊の制服に限られるのか、あるいは他の服装全般におよぶのかはいまのところはっきりしない。

六　意見衝突と嘆きの挿話三つ

修信使たちは現地で時々予想もしなかった言い争いや意見の食い違いを経験したり、気に入らない新聞報道に対して不満を抱いたりしたこともある。そのような場合、修信使たちはいかにして姿勢を崩さずその場を乗越えたり、あるいは悔しさを堪えたのかもいまは面白い挿話になりうる。ここではそのような挿話三つを拾って読みながら、修信使たちが他国で味わった苦労をしばらく垣間見ることにしたい。

(1) 元老院訪問を協議中、誤解が起こる

外務省の通訳官古沢経範が訪ねてきて日程を協議する途中、元老院訪問の話が出た。古沢は元老院の招きに応じるかどうかを聞いた。

「まだ承諾していませんが、元老院はどういう事務を司る官庁ですか。余は近頃体の具合いがよくないので命令通りに従うことはできません。」

古沢が言った。「元老院には行かれるべきです。元老院の議長はすなわち我が皇上の至親で、二品の親王であります。親王さまが貴公にお逢いしたくてお招きなさったのに、なぜ行かれないのでしょうか。願わくは改めてお考え願えれば幸いです。」

余は急に腹が立ち、顔色を変えながら言った。「親王は何の親王ですか。修信使が大した者ではないと雖も他国の奉命使臣です。ともすれば、見たいと言って容易く呼び出すのは、体統と礼節に照らしてもありえません。余は疲れてもいますが、今度のことに対しては断然と命令に従いません。」

古沢が言った。「そうではありません。自分の言葉に誤りがありました。親王さまは尊体として閣下を呼び寄せるのではなく、すなわち招請するという

話しであります。元老院は我が朝廷の大小事を会議する所で、その議長が他ならぬ親王であります。ただいま両国が改めて旧好を取り戻すようになったので、我が国の規模と施設を貴国にお知らせしなければなりません。従って私邸ではなく元老院に招請したのです。先生はなぜ過慮なさるのでしょうか。」

＜『日東記游』巻二問答＞

この解明で誤解は一応解け、結局招請には応じるが、感情的には勝手な呼びだしに不満を抱いていたようである。実際に金綺秀は何回かの見物勧めを適当な言い訳で退ける。外務省を初めて訪問した時、大丞宮本小一は金に、せっかくの機会であるから何ケ月でもゆっくり休みながら暇をみて遊覧するよう勧めたが、金は王が自分を待っているので速やかに戻らなくてはいけないと言っている。また、権大丞森山茂も八省の卿を順次訪問するよう勧めるが、金は夙に例がないと言って難色を示す＜『日東記游』巻二問答＞。その他にも上述したように帰国途中、横浜を出た船はなぜか横須賀で一泊する。ここには造船所があって、いま火輪船を造っているから見物するよう再三勧められるが、病を言い訳に船から降りなかった。さらに外務卿寺島宗則は大阪の造幣局を是非とも見物するよう頼んだ。神戸

から大阪は火輪車に乗れば日帰りもできると言うのであった。しかし、神戸に着いた時は、実際病に罹り、大阪行きは結局取り消しになった＜『日東記游』巻一停泊＞。

東京滞在中にも金はなるべく見物を避けた。その証拠として面白い実話がある。東京に着いて旅舎にはいる時、伝語官は表に坊曲番号を記した紐付の木牌二～三十枚を渡しながら「これを随員たちに配って自由に出入りさせて下さい。路に迷う心配がなくなります」という。それを警官に見せれば案内してもらえるとのことである。しかし、金はそれを寝床の傍に放っておいたまま、旅舎を出る時返した。見ると埃がつき、牌面の字がよくみえない程度であったという。もう一つの実例を引くと、ある日、外務省から旅舎に戻る途中のことである。正午に出発したが、いくら走っても旅舎は見えず、路上で夕方を迎えたのである。日本側が金に見物を勧めてもなかなか動かないから、市内のあちこちを遠回りしながら自然に見物できるよう配慮したのである。それを見極めた金は旅舎に着き、車（人力車か馬車かははっきりしない）から降りるやいなや小通事に答を掛けた。あちら側の無礼に対して黙っていた罪である。それからはあちら側もあえてそんな行為を取らなかった＜『日東記游』巻一留館＞という。

(2) 西洋人の下船を要求する

これも帰国途中のことである。船が横浜を出発する時、ふと船上に洋人が一人見えたので、金綺秀は早速護送官に伝えた。

「この船は確か日本船と雖も、今回の運行目的は我が行次を専送することである。よって我々が船から降りるまでは我が船とも言える。いかにしてこの船に洋人を乗せることができるのか。ただちにその人を船から降ろさせ、これ以上船に留めてはいけない」〈『日東記游』巻一乗船〉

実は、それまで日本人の技術だけでは蒸気船を安全に運行できなかったようである。そういうわけで、外務省はわざわざその西洋人を乗せ、船の安全運行を図ったのである。護送官はそのわけを明かした後、自分としては修信使の意向を外務省に報告し、その回示を待つしかしようがないという。その後、外務省の回示があったのか、西洋人は神戸で降りたのである。

(3) 旅舎の娘に与えた朴戴陽の絶句と新聞報道

朴戴陽一行は東京到着以来、新橋南鍋町の伊勢勘楼に泊まっていたが、主人に

は菊という娘が一人あった。彼女が朴にまめまめしく一筆を頼むので、朴はつぎのような絶句を書いて渡す。

金閨種菊度年華　　金閨に菊を植え、年月が経ち
聞是東京第一花　　聞けばこれ、東京第一の花
不有淵明誰得採　　陶淵明なき今、この花誰が採ろう
色香惟属酒人家　　色と香ただ酒飲みの宿に属するのみ

＜『東槎漫録』一八八五年一月十日＞

詩の内容は「東京に菊という名前の人がいると雖も、陶淵明のような靖節（綺麗な節操、操）を持つ人がいない今、菊の美しい色と香りは酔っぱらいが出入りするようなこの家で時を無駄にしている」程度の意味になる。いくらか侮って弄んだつもりであるが、これが新聞に取り上げられたのである。

日邦人はその意を知らず、朝鮮の欽差大臣が菊娘を愛し、詩を贈ったと多くの新聞紙に載せた。ばかばかしいことである。秋堂丈（正使徐相雨）は、この話しを聞いて絶句三首を詠んだ。余も和答の詩で弁解した＜『東槎漫録』一

八八五年一月十日〉

弁解の詩は巻末にまとめられてある漫詠につぎのような注記とともに出てくる。

毎日、時事新聞を見ると虚構と捏造で紙上を飾る。秋堂大人がこれを見て絶句三首（実際はなぜか二首しか見えない）を詠み志を表わした。余も和答の句で弁解した。

東来使節寸暇無　東へ来た使節、一寸の暇もない
時事伝聞語太殊　時事を伝聞すると、その語あまりにも違う
只信中心如白玉　ただ中心は白玉のごときを信じ
不関蠅鳥自喧呼　自らうるさい蠅と鳥には関与しない

〈『東槎漫録』巻末東槎漫詠〉

ここにみえる時事新聞が一八八二（明治十五）年三月、福沢諭吉と中上川彦次郎が創刊した日刊の時事新報であるかどうかは必ずしも明らかでないが、朴戴陽の詩は「使節として日本に来ている自分にはなんの暇もない。新聞が何といっても自分の心は潔白なので蠅や鳥の勝手なまねには関心がない」という意味である。自分の本心とは程遠い新聞報道に対する悔しさをそのように詠んで耐えきったの

であろう。

七　結びの一言

いままで朝鮮修信使たちの見聞を一応以上のようにまとめてみたが、全体的にはなぜか当時日本の新文明にかかわる施設とか制度に傾いている。ここにはそれなりのわけがある。

明治初期における日本の政策は富国強兵である。そのため、一旦、開放に踏みきった日本政府は、西洋文明を積極的に取りいれたので、当時の日本はあらゆる部門で生まれかわる最中であった。当然ながら、日本政府側のひとびと、中でも朝鮮の開化と通商を促すため、それがいい意味であれ悪い意味であれ、相当な努力を注いできた外務政策関係者たちは、当時としては朝鮮より一歩進んでいたいろんな施設や制度を朝鮮修信使に見てもらいたかったのであろう。実際、当時の外務政策担当者であった井上馨、宮本小一、森山茂、花房義質などは修信使と逢う度に日本の開化と新文明をよく見物し、いいものがあれば朝鮮もそれを思いきって取り入れるよう繰りかえして勧めている。その時、日本側は協力を惜しまない

つもりであるともいっている。実際、修信使たちの記録にもそういう問答内容がところどころにあらわれる。

しかし、朝鮮修信使たちの耳には、それが必ずしも甘く聞こえる話ではなかった。時代が早すぎたのである。確かに彼らがみた日本の機械化や軍事化、進んではあらゆる部門における文化と各種制度の変化は珍しかった。そこで彼らは珍しくみえる新文明の現実を一種の新しい情報として記録に残した。ただそれだけのことである。だから彼らは日本で見物した機械化と軍事化、その他の機構に対する構造と様式を細かいところまで記録しながらも、その一つ一つに対しては、むしろ肯定的な態度より否定的な態度を見せる場合が多かった。大体は守旧的であった当時の高級官吏が取るべき態度はそれしかなかったのである。

その後の朝日関係が意外にももつれてしまい、最後には両国合邦にまで走った原因がそこにあったと思われる。なぜなら、朝鮮時代の官吏といえば、大体は保守的な文官であり、学者的気質の持ち主である。彼らは大体伝統的に実利を恥じとみなし、名分のためには死も辞さない。中でも修信使に選ばれる程度の人物であればなおさらのことである。彼らに機械化や軍事化のような新文明の実利を見せつけたのは、日本外務当局者たちの見当違いだったのである。勿論、中には金

弘集、金玉均、朴泳孝のようにわりと開放的、進歩的な態度をみせた人物がなくもない。しかし、朝鮮朝廷の大多数の官吏はそれを容易く認めようとしなかった。そこから日本に対する疑いと反発が一層深まった事実を見逃してはならない。

修信使たちがいつも批判的な態度をみせたのではない。彼らは日本の自然美や人々の勤勉さと誠実さに讃えの言葉を惜しまなかったのである。自ら進んで重野安繹や中村正直のような学者を訪ね、その意見に耳を傾けたこともある。もし、当時の日本外務当局者が真に朝鮮朝廷との修好を願ったとすれば、修信使たちに機械化や軍事化を見せつけるより、朝鮮官吏の伝統的な性格を少しでも詳しく把握し、文化的接近を適切に図るべきであったと思われる。勝手ながら、これが朝鮮修信使以後の歴史を顧みながら現代を生きている自分なりの結論的判断である。

最後に一言書き添えておけば、修信使たちの見聞記録は韓国語学にも並みならぬ意味を持つ史料になる。そこには当時の日本で生まれた新生文明語、すなわち西洋文明を受容する過程で新しく生まれた漢字語が数多く見えるからである。修信使たちの記録に現われる新生文明語すべてが日本で生まれた言葉とは限らない。しかし、現代韓国語に生きている新生漢字語の中には日本語から直接受けいれたものが多い。それを受けいれ始めたのが修信使たちの記録なのである。

〔注〕

(1) 例えば、辛基秀『朝鮮通信使往来』(労働経済社、一九九三年)一三二―一三三頁の「朝鮮通信使一覧表」には一八一一年の十二回目が最後になっており、その後の修信使は見えない。

(2) 朝鮮では一八九五年十一月十七日を一八九六年一月一日に改め、新暦を採用した。しかし、修信使たちが日本訪問中、日本側から受け取った各種の公文書とか連絡用手紙の日付は新暦で記されている。したがって、修信使の記録を読むためには新暦の日付を知っておく必要がある。

(3) 朝鮮公使花房義質の提議に従い、一八八一年四月に創設された別技軍の教官となった人物。

(4) 日本の場合、一八七二(明治五)年までの日付は旧暦、一八七三(明治六)年からの日付は新暦を表わす。以下も同じである。一方、朝鮮の日付はすべてが旧暦である。

(5) ここからの文化史に関わる年代は次のような参考資料を利用しながら筆者なりに調べた結果である。出典は一々示さないが、場合によっては根拠を提示することもある。

『日本史総覧Ⅵ』(新人物往来社、一九八四年)。

『日本史資料総覧』(東京書籍株式会社、一九八六年)。

『近代日本総合年表』(第三版、岩波書店、一九九一年)。

紀田順一郎『近代事物起源事典』(東京堂出版、一九九二年)。

(6) 朝倉治彦・稲村徹元『明治世相編年辞典』(新装版、東京堂出版、一九九五年)七十九頁。

(7) 湯本豪一『図説明治事物起源事典』(柏書房、一九九六年)三〇八頁。

(8) 湯本豪一 前掲書 一六二頁。日本初の写真館は一八六二年、長崎で生まれたという見方もある。

槌田満文『明治大正の新語・流行語』（角川書店、一九八三年）三十三頁。

(9) 湯本豪一 前掲書 二十八―二十九頁。

(10) 湯本豪一 前掲書 一五〇頁。

(11) 湯本豪一 前掲書 四〇六頁。

(12) 湯本豪一 前掲書 三二二頁。

(13) 槌田満文『明治大正風俗語典』（角川書店、一九七九年）一三〇頁。

(14) 湯本豪一 前掲書 三三二頁。

(15) 樺島忠夫・飛田良文・米川明彦『明治大正新語俗語辞典』（東京堂出版、一九八四年）二三七頁。

(16) 湯本豪一 前掲書 二五二頁。

(17) 朝倉治彦・稲村徹元 前掲書 二二〇―二二一頁。

(18) 湯本豪一 前掲書 三八九頁。

(19) 湯本豪一 前掲書 三八八頁。

(20) 湯本豪一 前掲書 四一四頁。

(21) 湯本豪一 前掲書 一六〇頁。

(22) 佐藤亨『近世語彙の研究』（桜楓社、一九八三年）四十九―五十五頁。

(23) 槌田満文 前掲書 二五七頁、樺島忠夫・飛田良文・米川明彦 前掲書 二七七頁。

(24) 湯本豪一 前掲書 二二六頁。

(25) 湯本豪一 前掲書 四十六頁。

(26) 湯本豪一 前掲書 二九四頁。

(27) 湯本豪一　前掲書　二九二頁。

(28) 富田仁『鹿鳴館』―擬西洋化の世界―（白水社、一九八四年）一三八頁。

(29) 槌田満文　前掲書　九十二頁。

(30) 鹿鳴館に関わる前後の歴史は富田仁の前掲書『鹿鳴館』に詳しく見えるので、本稿では専らそれを参考にした。

(31) 湯本豪一　前掲書　四二二頁。

(32) 湯本豪一　前掲書　四二三頁。

(33) 上垣外憲一『ある明治人の朝鮮観』―半井桃水と日朝関係―（筑摩書房、一九九六年）二十九頁。

(34) この博覧会は同年三月一日から六月三十日まで東京の上野公園で開かれた。折しも、東京に泊まっていた紳士遊覧団一行も褒賞式に招かれ、遠目ながら明治天皇と朝官たちの服装をみたのである。

＊＊＊発表を終えて＊＊＊

明治初期の朝鮮使節は東京に赴く途中、京都にも立ち寄ったことがある。たとえば1881年の紳士遊覧団一行は５月17日(旧暦４月20日) 京都に着き、三条石橋堂島町の内田誠次の家で泊まりながらところどころを見物する。西陣織錦所小林綾造の家、万年山相国寺、陶器所、牧畜場、女学校、盲唖院、下京区西本願寺、水車製作所などをまわり、21日 (旧暦24日)には大津の琵琶湖、三井寺まで足を運んだ。

京都駅で汽車に乗った彼らは稲荷、山科を過ぎ、鑿山通路を通ったと記録している。ここにでてくる鑿山通路は恐らく京都大津間の鉄道開通直前の1880年６月28日、日本人の手で最初に貫通された逢坂山隧道であろう。

まことなら日文研のお蔭で京都に長期間滞在しているうちに、そのむかし朝鮮知識人たちが京都周辺に残した足跡を追って私もせめて一度は尋ねてみたかった。しかし一部をのぞいてはその場所が特定できず、念願はついに果たせなかった。

その代わり、今度の日文研フォーラムをきっかけに朝鮮使節の足跡全般を自分なりにまとめることができたのはなによりである。当日、コメンテーターとして心に残る助言を聞かせて頂いた千田稔先生、司会を担当して下さった研究協力課の篠原初江専門官、その他の関係者皆さんにもお礼の一言を申しあげておきたい。

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO.ローターモンド （フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮 （中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント K．グッドマン （カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ （スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉕	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉖	2.10．9 (1990)	ケネス・クラフト（リーハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ （カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン （ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ （ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ （ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント（フンボルト大学教授・日文研客員教授） Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

㉟	3．9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
㊱	3.10. 8 (1991)	王　暁平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
㊳	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4．1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン （デリー大学教授・日文研客員教授） Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4．3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス （フランス国立東洋言語文化研究所教授） Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4．4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー（プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授） Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4．5.12 (1992)	ポール・マッカーシー（駿河台大学教授） Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4．6．9 (1992)	G．カメロン・ハーストⅢ（ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長） G．Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ－徳川時代における武芸の発達－」
44	4．7.14 (1992)	杉本　良夫（オーストラリア・ラトローブ大学教授） Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
㊺	4．9．8 (1992)	王　　勇（杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授） WANG Yong 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13 (1992)	李　栄九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
㊼	4.11.10 (1992)	ウィリアム D．ジョンストン （米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授） William D．JOHNSTON 「日本疾病史考 －『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
㊽	4.12．8 (1992)	マノジュ　L．シュレスタ（甲南大学経営学部講師） Manoj L．SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐって－」
㊾	5．1.12 (1993)	朴　正義 （圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員） PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5．2．9 (1993)	マーティン・コルカット （米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授） Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5．3．9 (1993)	清水　義明（米国・プリンストン大学マーカンド栄誉教授） Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー（1854〜1919）とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5．4.13 (1993)	金　春美（高麗大学教授・日文研来訪研究員） KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5．5．11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ（ハワイ大学教授） Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5．6．8 (1993)	姜　希雄（ハワイ大学教授・日文研客員教授） H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 －科挙制度をめぐって－」
⑤5	5．7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ （ソフィア大学教授・日文研客員教授） Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り － 平安朝文学の特質－」
⑤6	5．9.14 (1993)	金　容雲 （漢陽大学教授・日文研客員教授） KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン （コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授） Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11．9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー （スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授） Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ（ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授） Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 －南蛮美術から洋学まで－」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン （ミシガン州立大学連合日本センター所長） J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 －井上靖文学における『陰謀』－」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員） Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 －俳句の可能性を中心に－」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク （フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授） Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス（オハイオ州立大学助教授） Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ　D. マヒウォ （フィリピン大学アジア・センター準教授） Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉　建輝 （中国・南開大学副教授・日文研客員助教授） LIU Jian Hui 「『魔都』体験－文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ　J. クイン （オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授） Charles J. QUINN 「私の日本語発見－王朝文を中心に－」

67	6．9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Francois MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥⑧	6.11.15 (1994)	賈　蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭　飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦⓪	7．1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に－」
⑦①	7．2.14 (1995)	厳　紹璗 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦②	7．3.14 (1995)	王　家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦③	7．4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心に－」

⑭	7．5．9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7．6．6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7．7.25 (1995)	崔　吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑰	7．9.26 (1995)	蘇　徳昌（奈良大学教養部教授） SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑱	7.10.17 (1995)	李　均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「－日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑳	7.12.19 (1995)	タチヤーナ　L．ソコロワ＝デリューシナ （翻訳家・日文研来訪研究員） Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8．1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑫	8．2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8．3.12 (1996)	イザベル・シャリエ（神戸大学国際文化学部外国人教師） Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 － 近代批評における新語 －」
⑭	8．4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑮	8．5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑯	8．6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8．7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール（大阪学院大学助教授） Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶 － 文化を語る楽器」
88	8．9.10 (1996)	ハーバート　E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑲	8.10. 1 (1996)	王　秀文（中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授） WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 － 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰－」

90	8 .11.26 (1996)	王　宝平（中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授） WANG Bao Ping 「明治前期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8 .12.17 (1996)	陳　生保（中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授） CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨2	9 . 1.21 (1997)	アレキサンダー　N. メシェリャコフ （ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員） Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9 . 2.18 (1997)	郭　永喆（韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授） KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9 . 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル（スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長） Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨5	9 . 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授） Michele F. MARRA 「弱き思惟　－　解釈学の未来を見ながら」
⑨6	9 . 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ（京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授） Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 －　なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨7	9 . 6.10 (1997)	ヤン・シコラ （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） Jan SYKORA 「近世商人の世界－三井高房『町人考見録』を中心に－」

98	9．7．8 (1997)	鶴田　欣也（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） Kinya TSURUTA 「向こう側の文学－近代からの再生－」
⑨⑨	9．9．9 (1997)	ポーリン・ケント（龍谷大学助教授） Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン （カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授） Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か－21世紀に向かって」
⑩⑪	9.11.11 (1997)	金　禹昌　KIM Uchang （韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ　Livia MONNET （カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク　Carl MOSK （カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ　Jan SYKORA （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） 鶴田　欣也　Kinya TSURUTA（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人－外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ（龍谷大学助教授） Jonah SALZ 「猿から尼まで－狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜　信杓 （韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高　文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者－一休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー（筑波大学教授） Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才－語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に－金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎　博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘　培培 (米国・バッサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか － 詩的イメージとしての典故 －」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪1	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』 ー 安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪2	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化 ー 芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Grenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪4	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについてー宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義ー沖縄からの挑戦」
⑪6	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化?」
⑪7	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

118	11. 5.11 (1999)	金　知見 （韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授） KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ （モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・日文研客員助教授） Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
120	11. 7.13 (1999)	リース・幸子　滝 （ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授） REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋　敏 （国民大学校文化大学学長・日文研客員教授） SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン　ノエル　ロベール （フランス　パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授） Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文-死語の将来-」
123	11.11.16 (1999)	ヴラディスラブ　ニカノロヴィッチ　ゴレグリャード （ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部極東部長・日文研客員教授） Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14 (1999)	楊　暁捷 （カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授） X. Jie YANG 「鬼のいる光景-絵巻『長谷雄草紙』を読む-」

○は報告書既刊

なお、報告書はホームページのデーターベースで見ることが出来ます。

****
発 行 日　2000年3月31日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ: http://www.nichibun.ac.jp/
問 合 先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課
****
© 2000　国際日本文化研究センター

■ 日時

1999年 9 月 7 日 (火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金　京都支部